

今後の松戸市立図書館のあり方 ～ 本館・分館の現状分析 ～

松戸市立図書館

はじめに

少子高齢化、情報や技術をめぐる変化、グローバル化など、現代の社会を取り巻く環境の急激な変化に伴い、全ての人々が生涯を通じて、学び続けることができるよう生涯学習の推進が求められてきました。そのような中、その生涯学習の一環を担う社会教育施設として、図書館に求められる機能も多様化してきています。

松戸市立図書館においても、市民の皆さまが生涯にわたり必要とされる知識や情報を提供するとともに、新たな機能やサービスを提供していかなくてはならないと考えます。また、その機能を継続していくためには、老朽化や耐震性が問われている施設の環境整備も視野に入れていかなくてはなりません。

現在、松戸市では公共施設再編に取り組んでおり、その1つとして、図書館施設についても検討が必要な時期となっています。

そこで、今後、図書館機能や施設整備について検討するにあたり、図書館の機能やサービスといったソフト面だけでなく、施設や設備等のハード面においても、判断を求められることが想定されることから、その際の政策的な判断や検討する際の材料となるよう、「松戸市図書館整備計画」や全国的な図書館の動向を踏まえ、現状認識や課題抽出、有識者インタビュー、本館・分館の現状分析等を行い、「今後の松戸市立図書館のあり方」を作成するに至りました。

目次

はじめに.....	2
目次.....	3
第1編 現状認識.....	6
1. 全国及び周辺自治体における公共図書館の動向.....	6
1.1. 全国的な動向.....	6
1.2. 東葛地域や常磐線沿線、首都圏の類似エリアの状況.....	7
2. 「松戸市の文化」や「松戸らしさ」.....	8
3. 松戸市の計画と図書館.....	10
3.1. 松戸市総合計画及び松戸市立地適正化計画における図書館のあり方.....	10
3.2. 松戸市公共施設等総合管理計画.....	12
3.3. 松戸市社会教育計画.....	14
3.4. 松戸市図書館整備計画に示されている目指すべき方向性.....	15
第2編 課題抽出・論点提示.....	16
1. 松戸市立図書館のあり方検討にあたる視点.....	16
2. 松戸市立図書館の課題.....	17
2.1. 本館と分館の数.....	17
2.2. 本館と分館の規模.....	18
2.3. 蔵書及び資料の保存場所.....	19
2.4. 閲覧スペース.....	20
2.5. 利用者向けのインターネット利用環境.....	20
3. 潜在的な市民の力の可視化.....	21
4. 松戸市の地域課題.....	22
5. 人的資源の課題.....	23
第3編 今後のあり方.....	24
1. 今後の図書館機能.....	24
1.1. 課題発見・解決型図書館かつ滞在・交流型への拡張.....	24
1.2. 松戸市としての方針.....	25
1.3. 「松戸市図書館整備計画」における図書館施設の構成及び規模.....	27
1.4. 複合施設としての図書館のあり方.....	28

2.	中央館のあり方	29
3.	地域館のあり方	30
4.	分館のあり方	32
4.1.	現状維持案	33
4.2.	延床面積 200～300 m ² 規模の分館へ集約する案	34
4.3.	サテライト案	35
5.	千葉県立西部図書館	35
6.	アウトリーチサービスのあり方	36
7.	図書館に求められる機能	37
7.1.	次世代を担う子どもたちを育むための支援	37
7.2.	ビジネス支援	38
7.3.	格差解消支援	39
8.	学校図書館との連携	40
9.	運営モデル案	41
9.1.	多様な運営モデル	41
9.2.	市民や企業との協働	42
10.	窓口業務の効率化・自動化の促進	43
11.	各種計画の策定	43
12.	産学官連携の促進	43
第4編 インタビューのまとめ		44
1.	有識者インタビュー	44
1.1.	おい図書館代表 青木 和子	44
1.2.	元松戸市生涯学習部長／松戸市図書館整備計画審議会委員 青柳 洋一	45
1.3.	NPO 法人松戸子育てさぽーとハーモニー理事長 石田 尚美	46
1.4.	松戸商工会議所専務理事 薄葉 博司	47
1.5.	昭和女子大学名誉教授 大串 夏身	48
1.6.	柏市学校図書館	49
1.7.	聖徳大学文学部准教授 片山 ふみ	50
1.8.	株式会社キカワ代表取締役 木川 総一郎	51
1.9.	流通経済大学法学部准教授 坂野 喜隆	52
1.10.	パパサークルメンバー 佐藤 慎一郎	53

1. 11.	社会福祉法人六高台福祉会常務理事 正田 貴之.....	54
1. 12.	立命館大学文学部教授 常世田 良	55
1. 13.	聖徳大学児童学部教授 長江 曜子	56
1. 14.	馬橋小学校／新松戸西小学校学校司書 畑澤 隆子.....	57
1. 15.	聖徳大学文学部教授 村山 隆雄	58
1. 16.	松戸市社会教育委員／人権擁護委員 森 めぐみ.....	59
1. 17.	絵本の会「たんぽぽ」副代表 渡辺 加代子.....	60
1. 18.	NPO 法人絵本で子育てセンター認定絵本講師 溝原 有香.....	61
2.	学生グループインタビュー	62
2. 1.	聖徳大学文学部 学生グループインタビュー	62
	おわりに.....	65

第1編 現状認識

1. 全国及び周辺自治体における公共図書館の動向

1.1. 全国的な動向

近年、全国各地では、大型の図書館を中心とした複合施設が開館し、人々の注目を集めています。こうした図書館の多くは、これまで図書館が担ってきた資料の収集・整理・保存・提供だけでなく、生活に根ざした問題・課題の解決及び家庭と職場や学校に次ぐ第3の居場所（サードプレイス）として地域住民に交流や憩いの場を提供し、まちの賑わい創出への貢献などを大きく打ち出しており、人口減少から導かれる縮小社会が全国的な課題となる中で、人と情報が交わる空間としての図書館の可能性が具体的な形となりつつあります。

このように、新しい図書館（を含む複合施設）がオープンしたという華やかな報道に目が向きがちですが、図書館のバージョンアップを試みる動きは継続して行われてきました。

課題解決型の図書館については、「地域の情報ハブとしての図書館（課題解決型の図書館を目指して）」¹とする提言を文部科学省が2005年（平成17年）に策定しています。また、賑わい創出のための図書館については、同じく文部科学省が2014年（平成26年）に「図書館実践事例集～人・まち・社会を育む情報拠点を目指して～」²の中で「まちづくり」の項目を設け、14自治体の図書館を事例としてまとめています。

ここ数年の新たな図書館の開館は一過性の流行りではなく、文部科学省の政策とそれに基づいた各自治体の取り組みの上に実現されたものです。

松戸市でも、2015年（平成27年）5月に「松戸市図書館整備計画」を策定し、6つの目指すべき図書館像を提示しました。その翌年3月には、策定を担った松戸市図書館整備計画審議会が整備計画の具体的な実現に向けた提言を行うとともに、計画の着実な実施を求めました。

全国的な図書館の動向を踏まえて策定された「松戸市立図書館整備計画」と、その実現に向けた提言を実行していくためには、図書館に対する市民の関心を喚起し、新たな図書館を求める機運を高めていく必要があります。

¹ 文部科学省「地域の情報ハブとしての図書館（課題解決型の図書館を目指して）」（2005年1月28日更新）より
[http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05091401.htm]（最終アクセス日：2019年2月1日）

² 文部科学省「図書館実践事例集～人・まち・社会を育む情報拠点を目指して～」（2016年3月更新）より
[http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/jirei/]（最終アクセス日：2019年2月1日）

1.2. 東葛地域や常磐線沿線、首都圏の類似エリアの状況

松戸市は千葉県東葛地域（北西部）に位置し、居住地によっては、JR・新京成松戸駅が最寄りの駅となる松戸市立図書館本館（築45年）よりも、隣接する他の自治体など、日々乗車する鉄道沿線の図書館を利用する市民も少なくありません。また、首都圏のベッドタウンとして発展した松戸市には、都内に通勤や通学する市民も多く、都心の図書館を利用するケースもあります。そのため、実際の市域ではなく、日々の移動ルートや行動範囲の中で、利用しやすい他の自治体の様々な施設を利用することが日常的に起きており、それは図書館についても例外ではありません。

この「今後の松戸市立図書館のあり方」を作成するために行われた有識者インタビューでも、近隣自治体の図書館の利用経験に基づいた意見もありました。それらの図書館は松戸市の図書館に比べると比較的新しく、閲覧席が十分に確保された空間設計や仕事帰りでも立ち寄れる開館時間の設定、通勤・通学のルート上にある駅近立地などが評価されています。

このように、松戸市民が近隣自治体の図書館を利用する一方、市境に近い分館は、隣接自治体の住民にも利用されています。有識者インタビューとともに今回のあり方作成にあたって行われた分館訪問調査でも、市境に近い分館で越境利用者による分館利用についての話もありました。

隣接する自治体の中で松戸市と状況が類似しているのは、柏市です。柏市立図書館本館は中心市街地である柏駅が最寄り駅にも関わらず、駅から本館までの公共交通機関がなく、建物も築43年と老朽化しており、既存の貸出サービスから、課題解決型や滞在型への拡張が難しい状況が続いています。地域に密着した近隣センターを中心に、延床面積が比較的小さな分館を17館（こども図書館を含む）有する点でも、小さな分館を19館有する松戸市立図書館と共通性があります。これらの分館が入る近隣センターの老朽化も進んでおり、建て替えの時期が迫っています。

また、JR常磐線沿線駅を中心とした中心市街地と、その後が開発が進むエリアとのバランスをどう考えるかといった、市域全体を見たときに求められている課題もあります。柏市では、2018年度（平成30年度）に図書館の新設を前提としない「柏市図書館のあり方」³の策定が進められました。それぞれの自治体は独自性をもって図書館政策を推進していくべきですが、東葛地域で隣接する松戸市と柏市の両市が情報の共有を図りながら、図書館づくりを進めていくことも、新しい時代に向けて必要であると考えます。

■有識者インタビュー⁴のまとめから

- 読み聞かせに使う本を図書館で借りることができればよいが、日常の動線上になく、開館時間も共働き世帯の生活スタイルに合っていない
- 医療・法律・ビジネス支援など高度なサービスを提供する図書館が増えているが、松戸市は努力しているとはいえ、まだ追いついていない

³ 柏市「『柏市図書館のあり方』の策定について」より（2019年1月22日更新）

[<http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/280700/p046994.html>]（最終アクセス日：2019年2月1日）

⁴ 『松戸市立図書館あり方』策定にあたって実施された有識者インタビューの中から、関連するご意見を抜粋して掲載しています。有識者インタビューの結果については、本あり方の第4編「インタビューのまとめ」として掲載しています

2. 「松戸市の文化」や「松戸らしさ」

図書館が今後も強化していく領域として、地域資料の収集・整理・保存・提供を通じて、地域文化の継承と発展に寄与することが挙げられます。シビックプライド⁵の醸成に貢献することで、市民が松戸に愛着をもち、そして松戸に住み続けたいと思えるようになることは、冒頭でも触れた人口減少・縮小社会の中で、「選ばれる自治体」になるために不可欠な要素の1つとなっています。松戸市は首都圏のベッドタウンとして恵まれた立地にあることから、人口減少・縮小社会の影響を実感する機会はまだまだ多くありませんが、人口変動の長期的な影響を見越して、様々な政策を進めていく必要があります。図書館政策についてもそれは変わりません。こうした流れを踏まえ、「松戸市図書館整備計画」でも、これから図書館が目指すべき6つの図書館像の1つとして、『『まつど』の歴史と文化を伝える図書館』を挙げ、その中で「郷土の歴史や文化を知り、新たな文化を創る拠点の整備」を掲げています。この方針を具体的に実行していくためには、「松戸の文化」や「松戸らしさ」について、市民に知っていただく仕組みやきっかけを創っていく必要があります。

例えば、当時の水戸街道に沿って残る松戸宿跡には当時を偲ばせるような軒の低い建物や寺社が点在し、江戸へと向かう渡し場「矢切の渡し」近くの河川敷の眺めには、往時の面影を感じることもあるでしょう。また、その他にも「旧徳川昭武庭園（戸定邸庭園）」が国の名勝に指定されるなど、国の重要文化財に指定されている戸定邸をはじめとした貴重な文化財を多数有しています。こうした歴史的な文化資源に関連する情報を、市民に限らず松戸市に関心を持つ方々に伝えていくことも、松戸市立図書館だからこそ期待される役割であり、図書館が取り組むべき情報発信です。

産業や商業面に目を向けると、商工会議所には1万を越える事業者が登録するなど、多様な地場産業が息づいている他、地域団体商標を取得した「矢切ねぎ」や明治時代から「二十世紀梨」の原産地として知られるなど、特産物も多数あります。また、飲料製造や食材加工の他、日本を代表する小型モーターメーカーの本社があるなど、様々な分野の企業・工場等を有しています。近年ではコンテンツ産業⁶の振興政策による新たな産業の萌芽も見られます。また、日本を代表するドラッグストアチェーンの創業の地であり、創業社長の松本清氏が市長を務めていた昭和44年に開設された「すぐやる課」は、全国の自治体に先駆けた市政改革の取り組みとして広く知られています。こうした産業や商業活動に携わる市民の課題解決に資するサービスの充実とともに、松戸市が有する経済活動を見える化するなど、市民により広く知ってもらう役割なども図書館に期待されています。

さらに、松戸市には専門分野の異なる5つの大学・短期大学がキャンパスを構えており、文教地区としての様々な学びの機会の提供が可能であるという要素を有している点も、積極的に活かすべき特徴だと言えます。今回の有識者インタビューでも市内の大学所属の先生方にご協力いただいたように、こうした知的資源を市民の財産として発揮していただけるように働きかけていくことも重要であると考えます。そのために、各大学と市民をつなぐハブ（拠点）となることも、図書館には期待されています。

■有識者インタビューから

- 複数の大学があり多様な教育資源と学びの場が市内にある。そのため、連携の可能性が
ある
- 松戸は市街地で大きく、松戸駅周辺は若い人も多い。大学もいくつかあり、学びのまち
であるイメージ。戸定邸に代表される徳川の遺産が色濃く残る地域でもある

⁵ シビックプライドとは、自分の住むまちや都市への誇りや愛着のこと

⁶ コンテンツ産業とは、音楽や映画、小説やアニメなどの制作や流通を担う産業のこと

このように、松戸市には多くの文化資源がありますが、いざ松戸らしさや文化的な特徴について市民に問いかけると、明確な答えが得られないことが少なくありません。有識者インタビューでは、都心に通勤・通学する松戸市民が多いため、自身の居住地域に関心の薄い人が多いことが、「松戸らしさ」を定義しにくい理由となっているのではとのご意見もありました。しかし、松戸市には決して特徴がないわけではありません。

また、インタビューでは、松戸市には各分野の第一線で活躍する市民が多数暮らしており、そうした方々が持つ潜在能力は大変高いとの声もありました。図書館には、市民活動の可視化と市民交流の拠点としての機能を発揮することも求められているものと考えます。

■有識者インタビューから

- 貸出や広場としての場所提供だけではなく、松戸独自の文化的資料をしっかりと収集保存することが大事
- 松戸市は環境もよく、人材も豊富だが、それらの資産が生かされていない
- 様々な分野の第一線で活躍している市民が暮らしているが、出会いや交流の場がなく、その能力を市のまちづくりに生かしてもらえない
- 松戸市民と図書館利用率の高い周辺自治体の市民との間に大きな違いはなく、市民の図書館に対する期待は大きい。また、図書館の潜在的な利用者は少なくない。市民と行政が組んで良い図書館をつくれる可能性が大きい地域である

3. 松戸市の計画と図書館

3.1. 松戸市総合計画及び松戸市立地適正化計画における図書館のあり方

これまで述べてきたように、松戸市は首都圏のベッドタウンとして発展を続けています。2018年（平成30年）1月1日から12月31日までの間に、常住人口が2,169人増加し、総人口は490,875人（226,481世帯）となりました⁷。2011年（平成23年）4月に策定された「松戸市総合計画 後期基本計画（平成23年度～32年度）」では、2020年度の人口を50万人と設定し、50万人規模の維持に向けた施策を展開しています。

しかし、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、松戸市の人口は今後減少に転じることが予想されています⁸。昭和30年代後半の常盤平団地をはじめとした大規模な団地造成による入居者の流入に伴い、昭和50年代までに急激に人口が増加しました。しかしながら、当時の入居者世代が一斉に高齢者世代へと移行するため、今後、高齢化への様々な対応が迫られるものと推測されま

す。国では、人口減少社会においても、持続可能な都市経営を行っていくため、都市再生特別措置法を改正し、2015年（平成27年）に立地適正化計画を制度化し、創設しました。この制度は、「商業・医療・福祉等の民間施設を含めた各種生活サービス機能や住居等を計画的に誘導するとともに、公共交通の充実により、生活サービス機能へアクセスしやすい環境を整えることで、コンパクトシティ・プラス・ネットワーク型のまちづくりを目指す⁹」ことが目的となっています。これを受け、2018年（平成30年）3月に策定された「松戸市立地適正化計画」では、人口減少や高齢化を考慮し、子育て支援や集客性の高い賑わいのある拠点として、松戸市における図書館のあり方についての方向性が示されています。

◆ 本市における立地適正化計画策定のねらい

- (1) 民間投資の誘発や国の支援制度の効果的な活用による、駅周辺等の拠点性強化
 - …都市機能誘導区域や誘導施設等を明示することによる民間投資の誘発
 - …都市機能誘導及び居住誘導に向けた国の支援制度を効果的に活用
- (2) 広域性・集客性の高い施設の立地誘導や公共施設の更新による都市の魅力向上
 - …子育て支援施設等の誘導による、子育て世代の流入増を目指したまちづくりの推進
 - …大型商業施設や図書館等、広域性・集客性の高い施設の誘導・更新による、賑わいのある拠点の形成
- (3) 既存住宅ストックの活用推進や駅周辺のまちの更新による人口流入
 - …大規模団地等の既存住宅ストックの活用推進
 - …駅周辺の拠点性強化と合わせた、魅力的なまちなか居住空間の創出

〔出典〕松戸市「松戸市立地適正化計画」〔2018年（平成30年）3月〕3ページより

「松戸市立地適正化計画」では、図書館について、より具体的な考え方も示されています。図書館は集客性・利便性を高め、市全体の魅力向上に繋げる「攻め」の施設であるとともに、公共交通によるアクセスが容易な鉄道駅等の周辺への立地・集積を基本とすることが述べられています。

⁷ 松戸市「松戸市の人口動態（平成25年1月中から月毎）」（2018年12月6日更新）より

〔<https://www.city.matsudo.chiba.jp/profile/jinkoutoukei/jinkou/jyoujyu/jinkoudoutai.html>〕（最終アクセス日：2018年12月19日）

⁸ 国立社会保障・人口問題研究所「概要に掲載されたデータ・結果表-『日本の地域別将来推計人口』（平成30（2018）年推計）」「結果表1 総人口および指数（平成27（2015）年=100とした場合）」より（Excel作成のグラフを次ページに「参照グラフ1」として添付）〔http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson18/2gaiyo_hyo/gaiyo.asp〕（最終アクセス日：2018年12月19日）

⁹ 松戸市「松戸市立地適正化計画」（2018年3月）「ごあいさつ」のページより

〔<https://www.city.matsudo.chiba.jp/shisei/toshiseubi/tosi/ritteki.files/ricchitekiseikaikaku.pdf>〕（最終アクセス日：2018年12月19日）

【視点1】 まちづくりの基本方針①の実現を目指す

○まちづくりの基本方針①「広域からの集客により賑わいを生み出すとともに、市民の暮らしの質を高める拠点の形成」に掲げた両面に主眼をおいて施設を区分

区分	考え方
集客性・利便性を高め 市全体の魅力向上に繋げる施設	本市の集客性を高める大型商業施設・図書館等の施設をはじめ、医療・福祉・子育てにおける相談や集いの場を提供する等して、市民の利便性を高めることで、市全体の魅力向上に繋げるために「攻め」の考えにより誘導する施設。
日常生活の暮らしの質を 高める施設	各世代共通して利用するコンビニエンスストア、郵便局等の日常的に利用される施設をはじめ、自宅から身近な場所での立地が求められる市民センターや診療所、高齢者向け施設等は、市民の暮らしの質を確保し、日常生活を守っていくものであるため、それら施設が有する役割が市内全域に効果的に発揮される様、「守り」の考えにより誘導する施設。

〔出典〕松戸市「松戸市立地適正化計画」〔2018年（平成30年）3月〕38ページより

【視点2】 施設ごとの特性や配置の考え方を考慮する

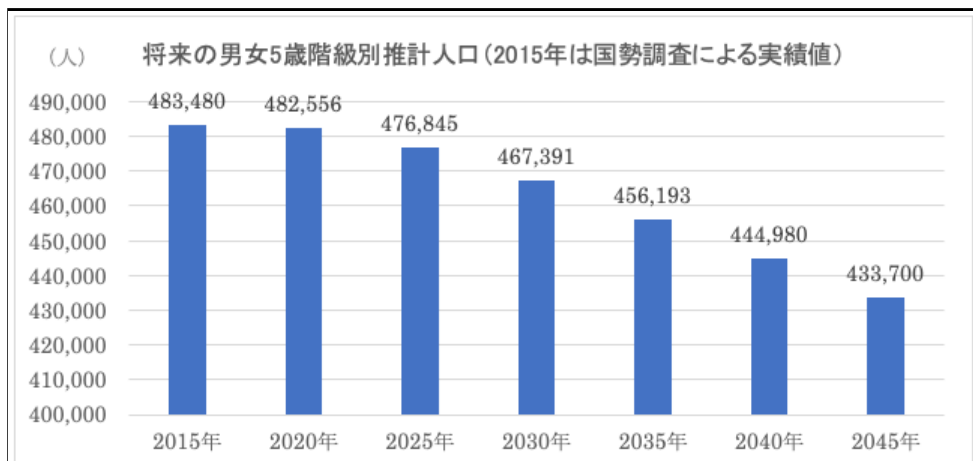
○各施設の特性や本市における立地状況、施設所管課の考え方を踏まえ、以下の考え方のもと、施設を区分

区分	考え方
拠点集積型施設 (拠点利用圏への集積が望ましい施設)	大型商業施設や図書館等、広域性・集客性の高い施設や、公共交通によるアクセスが容易な鉄道駅等の周辺に立地・集積していた方が利用しやすい施設については、各拠点への集積を基本とする。
市内分散型施設 (生活に身近なエリアにバランス良く配置することが望ましい施設)	高齢者向け施設や診療所、コンビニエンスストア等、極力生活の身近に立地していることが望ましい施設については、拠点のみへの誘導は行わず、分散配置を基本とする。

〔出典〕松戸市「松戸市立地適正化計画」〔2018年（平成30年）3月〕38ページより

以上を踏まえて、図書館が松戸市の目指す賑わいを創出する交流拠点として機能しているか、また、公共交通によるアクセスが容易な鉄道駅等の周辺に立地・集積する場合において、立地場所を含め図書館整備をどのような方向性で進めるのかについて検討する必要があります。

【参照グラフ1】



〔出典〕国立社会保障・人口問題研究所「概要に掲載されたデータ・結果表-『日本の地域別将来推計人口』

〔2018（平成30）年推計〕結果表1 総人口および指数〔2015（平成27）年=100とした場合〕（Excel）より

3.2. 松戸市公共施設等総合管理計画

2017年（平成29年）3月に松戸市が策定した「松戸市公共施設等総合管理計画」では、公共施設等の具体的な再編整備計画の大きな方針が示されています。

松戸市では、高度成長期の人口増加に対応して集中的に整備された公共施設が多く、建設後30年以上経過した施設が約73%を占めており、教育施設を中心に今後10年の間には更新時期を迎え始めるため、施設の老朽化対策が必要となります¹⁰。

また、日本建築学会が1988年（昭和63年）に発表した「建築物の耐久計画に関する考え方」の標準耐用年数に基づき、松戸市では、木造・軽量鉄骨造の耐用年数を40年、その他の建築物の耐用年数は60年に設定しています。建設後または建替後の30年目に大規模修繕を行うものとしておりますが、そのうち今後10年以内に耐用年数を迎える建物については、大規模修繕を実施しない計画です。

「松戸市公共施設等総合管理計画」では、公共施設等の全体を把握し、長期的な視点をもって、更新・統廃合・長寿命化などを計画的に行うことにより、財政負担を軽減・平準化するとともに、公共施設等の最適な配置を実現するものとしています。分館が入っている複合施設は、築40年以上を超える施設が半数を占めており、さらにこれらの中にはバリアフリーに対応していない施設もあることから、今後の対策が求められています。

¹⁰ 松戸市「松戸市公共施設等総合管理計画」（2017年3月）4ページより
〔https://www.city.matsudo.chiba.jp/shisei/siyuzaisan/koukyoushiseitsu/sougoukannrikeikaku_files/hontai.pdf〕（最終アクセス日：2018年12月21日）

松戸市立図書館の開館年月、施設の築年数、延床面積、複合施設

図書館名	図書館本館	子ども読書推進センター	常盤平	稔台	小金原
開館年月	1973年11月 (昭和48年11月)	2010年3月 (平成22年3月)	1972年5月 (昭和47年5月)	1974年7月 (昭和49年7月)	1976年4月 (昭和51年4月)
施設の築年数*	45年	47年*	46年	44年	42年
延床面積(㎡)	1932.32㎡	322.50㎡	177.60㎡	122.56㎡	188.01㎡
複合施設	—	旧中部小学校 付属幼稚園内	市民センター	市民センター	市民センター
図書館名	矢切	馬橋	古ヶ崎	五香	小金**
開館年月	1976年4月 (昭和51年4月)	1976年11月 (昭和51年11月)	1976年12月 (昭和51年12月)	1977年11月 (昭和52年11月)	1978年7月 (昭和53年7月)
施設の築年数	42年	42年	42年	41年	40年
延床面積(㎡)	101.97㎡	66.22㎡	78.62㎡	68.50㎡	310.05㎡
複合施設	総合福祉会館	市民センター	市民センター	市民センター	市民センター
図書館名	明	六実	東部	新松戸***	馬橋東
開館年月	1978年10月 (昭和53年10月)	1979年7月 (昭和54年7月)	1980年7月 (昭和55年7月)	1981年5月 (昭和56年5月)	1983年4月 (昭和58年4月)
施設の築年数	40年	39年	38年	37年	35年
延床面積(㎡)	96.75㎡	146.45㎡	123.00㎡	217.39㎡	96.31㎡
複合施設	市民センター	市民センター	スポーツパーク	市民センター	市民センター
図書館名	小金北	松飛台	二十世紀が丘	八柱	八ヶ崎
開館年月	1984年4月 (昭和59年4月)	1984年10月 (昭和59年10月)	1986年2月 (昭和61年2月)	1988年10月 (昭和63年10月)	1991年10月 (平成3年10月)
施設の築年数	34年	34年	32年	30年	27年
延床面積(㎡)	79.89㎡	79.65㎡	90.03㎡	103.39㎡	93.18㎡
複合施設	市民センター	市民センター	市民センター	市民センター	市民センター
図書館名	和名ヶ谷	<p>* 各施設の築年数は、2019年(平成31年)1月1日現在で算出。 子ども読書推進センターは旧中部小学校付属幼稚園の築年数。</p> <p>** 小金の延べ床面積は「閉架書庫」を含む。</p> <p>*** 新松戸の延べ床面積は「こどものとしょかん」を含む。</p>			
開館年月	1996年5月 (平成8年5月)				
施設の築年数	22年				
延床面積(㎡)	183.53㎡				
複合施設	スポーツセンター				

[出典] 松戸市立図書館「平成30年度 図書館要覧」3ページより

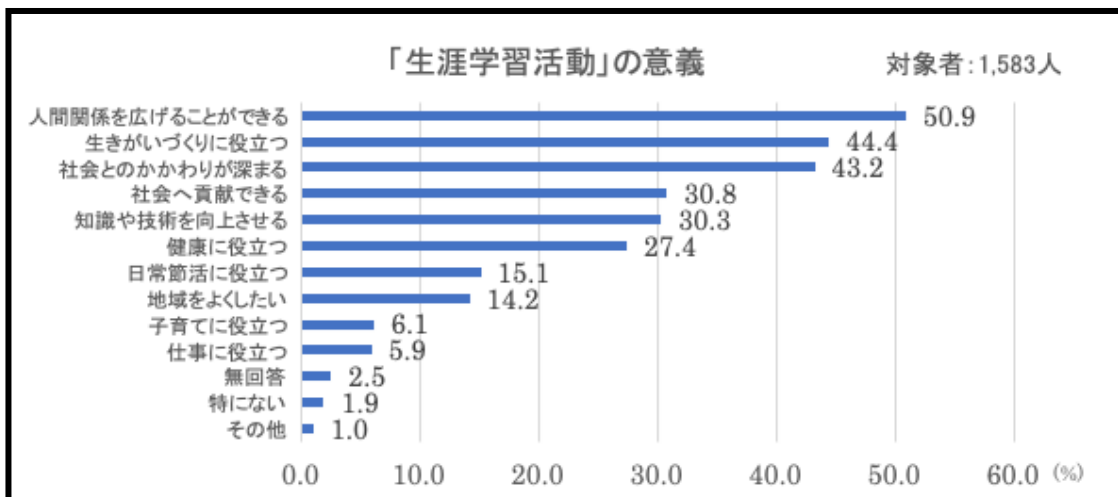
なお、松戸市内にある千葉県立西部図書館も、築30年以上が経過しています。

図書館名	千葉県立西部図書館
開館年月	1987年4月(昭和62年4月)
施設の築年数	31年
延床面積(㎡)	3261.70㎡(書架等含む)
複合施設	—

[出典] 千葉県立図書館「平成30年 要覧」42ページより

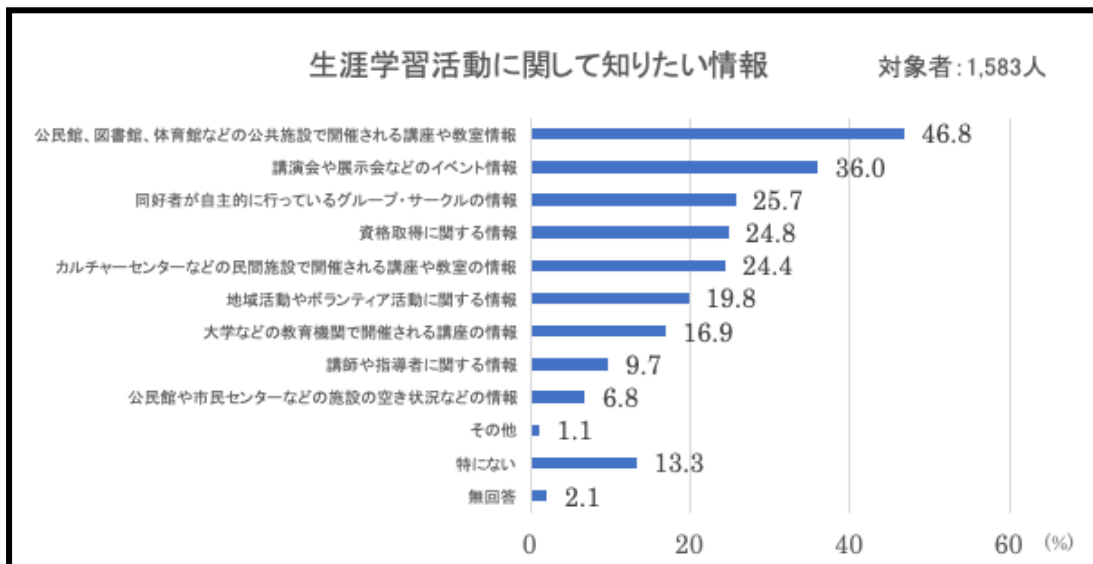
3.3. 松戸市社会教育計画

社会教育活動の拠点としての図書館のあり方を考える際、市民が「何を求めて学ぶのか」を考慮する必要があります。2015年（平成27年）5月に策定された「松戸市社会教育計画（平成27年度～32年度）」には、2014年（平成26年）に実施された「松戸市社会教育に関するアンケート調査報告書」の結果をみると、「生涯学習活動」の意義が示されており、「人間関係を広げること」を重視している人が多いことがわかります。



〔出典〕松戸市「松戸市社会教育計画（平成27年度～32年度）」〔2015年（平成27年）5月〕
資料編4 松戸市社会教育に関するアンケート調査報告書の概要 70 ページより

加えて「生涯学習活動に関して知りたい情報」として、「公民館、図書館、体育館などの公共施設で開催される講座や教室情報」「講演会や展示会などのイベント情報」へのニーズが高いことが示されています。



〔出典〕松戸市「松戸市社会教育計画（平成27年度～32年度）」〔2015年（平成27年）5月〕
資料編4 松戸市社会教育に関するアンケート調査報告書の概要 77 ページより

このように、知識を向上させるだけではなく、人とのつながりを生み出す社会教育活動が期待されている中、「松戸市社会教育計画」の基本理念として掲げる「自ら学び 学びあう、人と人がつながるまち」を実現するためには、図書館がどうあるべきかを再考する必要があります。

3.4. 松戸市図書館整備計画に示されている目指すべき方向性

「松戸市図書館整備計画」には、松戸市の図書館の特長と課題が示されています。

特長	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 本館を中心に市内各所に分館が設置され、市民の利便性が高い ◆ 高齢者施設への巡回や寝たきりの方への宅配など、来館が困難な方に、きめ細やかなアウトリーチサービスを実施 ◆ 読み聞かせ等の児童サービスに積極的に取り組み、文部科学省より『子どもの読書活動優秀実践図書館』の表彰を受けている
課題	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 施設の老朽化が進み、バリアフリー化にも対応できていない ◆ 施設が狭隘化し、資料を所蔵する場所がないため資料そのものが不足している。また閲覧スペースが狭く、席数も十分でないため、適切な利用ができない ◆ レファレンスなど、貸出以外のサービスについての周知と体制の整備が不十分 ◆ 人が集える環境や、人と人をつなげる機能が整備されていない ◆ 地域の歴史を学ぶ機能や関係機関との連携が不十分 ◆ 学校との連携など、子どもの読書を支える総合的な支援が不十分 ◆ 専門的知識を持った職員が不足している

〔出典〕松戸市教育委員会「松戸市図書館整備計画」〔2015年（平成27年）5月〕27ページより

これらの特長や課題を踏まえ、定められた「目指すべき方向性」は以下の通りとなっています。

◆ 目指すべき方向性

- 学び、集い、交流し、新たな創造を生み出すための機能
- 個別・専門的ニーズを満たすことのできる幅広い資料の収集、地域や個人の課題解決のための環境整備やICTの活用
- 郷土の歴史や文化を知り、新たな文化を創る拠点の整備
- 読書を通じた将来を担う子ども達の育成
- ゆったり滞在して閲覧できる環境整備
- 図書館を支える人材の育成及び適正配置

〔出典〕松戸市教育委員会「松戸市図書館整備計画」〔2015年（平成27年）5月〕28ページより

第2編 課題抽出・論点提示

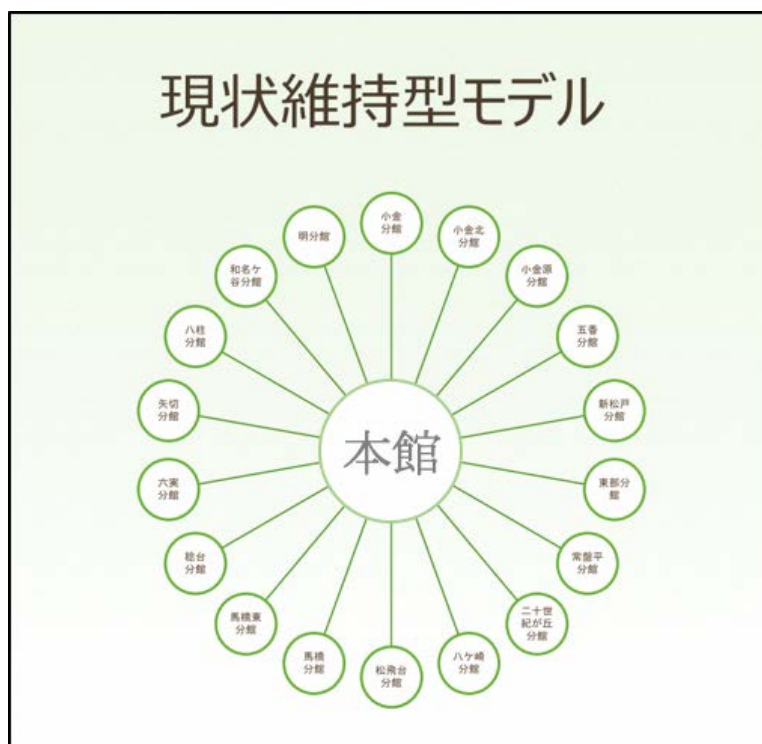
1. 松戸市立図書館のあり方検討にあたる視点

全国的に図書館を含む公共施設の老朽化が進む中、各自治体では施設の集約¹¹、複合¹²、転用¹³を含めた再編整備が検討されています。

松戸市でも「松戸市立地適正化計画」において、図書館が賑わいのある拠点として機能する役割を担い、アクセスが容易な場所への立地・集積への検討が示されています。さらに、「松戸市社会教育計画」の基本理念である「自ら学び 学びあう、人と人とがつながるまち」づくりや、松戸市立図書館が目指すべき6つの図書館像を実現するために、現在の本館と19の分館の体制が妥当なのかという観点から、現状把握を行いました。

その結果、松戸市の図書館が本館、分館ともに既存の施設を利用しながら20館体制を維持していく場合、上述の「松戸市図書館整備計画」で指摘していた、スペース（延床面積）の不足や蔵書の確保、建物のバリアフリー化や老朽化に対応することが難しく、人と人をつないで市民が集うことができる場としての図書館を実現することが厳しい状況にあります。

よって、「松戸市図書館整備計画」にもある通り、現状維持型モデルの見直しが必要なことは明らかです。



¹¹ 「同一用途の複数施設を統合し、一体の施設として整備する」こと

¹² 「異なる用途の公共施設を統合し、これらの施設の機能を有した複合施設を整備する」こと

¹³ 「既存の公共施設を改修し、他の施設として整備する」こと

上記 11～13 はいずれも「松戸市立地適正化計画」（2018年3月）28ページより抜粋

2. 松戸市立図書館の課題

2.1. 本館と分館の数

松戸市立図書館の特長として、本館と分館 19 館をあわせて 20 館で構成されている点が挙げられます。また、松戸市は駅の数が 6 路線 23 駅と多く、どこからでも駅にアクセスしやすい利便性の高いまちと評価されているように、図書館も市内のどこからでもアクセスが容易で利用しやすくなっています。

ここで、政令指定都市・特別区を除く人口 40 万人以上の自治体にある市立図書館の統計をみると、10 館を超える分館を有しているのは富山県富山市の 24 館、千葉県柏市の 17 館、兵庫県姫路市の 13 館ですが、市域は富山市の 1,241.8 km²、柏市の 114.7 km²、姫路市の 534.4 km²と、松戸市の 61.4 km²よりどの自治体も広がっています。また、松戸市と同規模の人口を持つ自治体をみると、埼玉県川口市 (59.3 万人) は 5 館、大阪府東大阪市 (49.7 万人) は 2 館、神奈川県藤沢市 (42.6 万人) は 3 館、大阪府枚方市 (40.6 万人) は 7 館と、同規模自治体と比べても松戸市は分館が圧倒的に多いことがわかります。

政令指定都市・特別区を除く人口 40 万人以上の自治体の図書館比較 ※人口順

自治体名	面積 (km ²)	人口 (千人)	図書館数	分館数
船橋市	85.6	627	4	3
鹿児島市	547.1	607	1	0
川口市	61.9	593	6	5
八王子市	186.4	563	6	5
姫路市	534.4	542	14	13
宇都宮市	416.8	522	5	4
松山市	428.9	517	4	3
東大阪市	61.8	497	3	2
松戸市	61.4	490	20	19
西宮市	99.9	485	4	3
倉敷市	354.7	484	6	5
大分市	501.2	479	2	1
市川市	57.5	477	6	5
福山市	518.1	472	7	6
尼崎市	49.8	464	2	1
金沢市	468.6	454	6	5
長崎市	406.4	436	2	1
高松市	375.1	430	5	4
町田市	71.8	427	8	7
藤沢市	69.6	426	4	3
豊田市	918.3	423	17	0
富山市	1242	419	25	24
横須賀市	100.7	415	4	3
岐阜市	203.6	414	7	6
柏市	114.7	409	18	17
宮崎市	643.7	406	2	1
枚方市	65.1	406	8	7
豊中市	36.4	403	9	8

〔出典〕公益社団法人日本図書館協会『日本の図書館 統計と名簿 2017』〔2018 年（平成 28 年）2 月〕より

※ 面積については、各自治体のウェブサイトを参照。

2.2. 本館と分館の規模

松戸市には、本館と分館を合わせて 20 館ありますが、本館及び分館それぞれの施設規模（面積）は 40 万人以上の人口を有する自治体と比較すると、非常に狭い状況となっています。

松戸市立図書館本館の延床面積は 1,932 m²で、各自治体の図書館本館（中央館）延床面積の平均 5,652 m²に比べるとかなり下回り、全体では最も狭い本館（中央館）となっています。また、分館延床面積の平均も 126 m²と、各自治体の分館平均延床面積である 1,412 m²の 10 分の 1 にも及びません。

本館と分館の延床面積の合計をみると、松戸市は 4,328 m²と、東大阪市の 3,688 m²よりは面積が広がっています。しかし、東大阪市の分館が 2 館しかなく、分館延床面積の平均は約 700 m²と広くとられている他、東大阪市には、日本一の蔵書数を誇る大阪府立中央図書館〔1996 年（平成 8 年）開館、延床面積 30,770 m²〕があることから、松戸市とは状況が異なります。松戸市のように延床面積が小さく滞在型ではないものの、市民に身近な図書館を数多く配置するのか、東大阪市のように分館の数は絞つつ、機能を充実・集約させた延床面積の広い図書館を整備するのか、今後は適正配置の方向性を検討する必要があります。

政令指定都市・特別区を除く人口 40 万人以上の自治体の図書館比較

※本館と分館の延床面積合計順

自治体名	本館の延床面積 (m ²)	分館数	分館の延床面積合計 (m ²)	分館の延床面積平均 (m ²)	本館と分館の延床面積合計 (m ²)
金沢市	6,340	5	20,101	4,020	26,441
宇都宮市	4,739	4	14,165	3,541	18,904
枚方市	9,302	7	6,629	947	15,931
川口市	6,940	5	8,884	1,777	15,824
姫路市	2,882	13	11,105	854	13,987
高松市	8,718	4	5,244	1,311	13,962
豊中市	3,272	8	10,254	1,282	13,526
富山市	4,621	24	8,464	353	13,085
倉敷市	4,868	5	8,015	1,603	12,883
船橋市	3,085	3	9,604	3,201	12,689
豊田市	12,567	0	—	—	12,567
長崎市	11,659	1	644	644	12,303
岐阜市	9,210	6	2,604	521	11,814
町田市	5,262	7	6,164	881	11,426
市川市	6,411	5	4,324	865	10,735
八王子市	5,581	5	5,129	1,026	10,710
西宮市	4,682	3	5,676	1,892	10,358
福山市	4,813	6	5,542	924	10,355
藤沢市	4,726	3	5,064	1,688	9,790
松山市	5,617	3	2,608	869	8,225
宮崎市	6,409	1	1,642	1,642	8,051
横須賀市	4,033	3	3,612	1,204	7,645
尼崎市	4,728	1	2,477	2,477	7,205
大分市	4,548	1	2,495	2,495	7,043
柏市	2,005	17	3,211	189	5,216
鹿児島市	5,146	0	—	—	5,146
松戸市	1,932	19	2,396	126	4,328
東大阪市	2,302	2	1,386	693	3,688
平均	5,586	6	6,055	1,424	11,208

〔出典〕公益社団法人日本図書館協会『日本の図書館 統計と名簿 2017』〔2018 年（平成 28 年）2 月〕より

2.3. 蔵書及び資料の保存場所

本館及び分館の規模と大きく関係してきますが、松戸市の図書館全体の蔵書冊数は約 59 万冊と、政令指定都市・特別区を除く、人口 40 万人以上の自治体の中で最も少ない状態であり、平均値である約 110 万 7,000 冊の約半分しか蔵書がないのが現状です。登録者 1 人当たりの貸出冊数を示す「実質貸出密度」でみても 9.6 冊で、全体の平均値の 6 割程度だということがわかります。

また、千葉県内の 38 自治体の図書館を比較しても、松戸市の人口 1 人あたりの平均貸出冊数を示す「貸出密度」は、千葉県内の平均の 6.0 冊より 1.5 冊低いことが確認できます¹⁴。国立国会図書館や千葉県立、他市町村との相互協力利用数においても、平成 29 年度の貸出冊数 3,788 冊に対して借受冊数 6,358 冊と、圧倒的に借受が多くなっていることも、蔵書が少ないことを示しています。

政令指定都市・特別区を除く人口 40 万人以上の自治体における図書館比較 ※蔵書冊数順

自治体名	蔵書冊数 (万点)	個人登録者数 (万人)	個人貸出数 (万点)	登録率 (%)	貸出密度 ¹⁵ (点)	実質貸出密度 ¹⁶ (点)
豊田市	176	35	331	83.20%	7.8	9.4
八王子市	164	14	264	23.90%	4.7	19.7
宇都宮市	152	17	423	32.10%	8.1	25.2
金沢市	152	19	267	41.70%	5.9	14.1
船橋市	149	20	239	31.20%	3.8	12.2
倉敷市	137	34	283	69.40%	5.9	8.4
市川市	131	12	277	24.50%	5.8	23.7
姫路市	128	9	228	15.80%	4.2	26.7
川口市	127	33	316	55.80%	5.3	9.5
枚方市	127	16	340	39.70%	8.4	21.1
藤沢市	123	15	367	35.60%	8.6	24.2
高松市	118	29	280	66.40%	6.5	9.8
町田市	117	42	406	98.30%	9.5	9.7
長崎市	116	9	190	19.40%	4.4	22.5
福山市	115	24	324	50.90%	6.9	13.5
西宮市	105	14	336	28.40%	6.9	24.4
豊中市	101	15	350	37.50%	8.7	23.2
富山市	101	11	184	25.00%	4.4	17.5
鹿児島市	94	36	192	58.80%	3.2	5.4
柏市	92	8	199	19.80%	4.9	24.5
横須賀市	82	27	154	65.00%	3.7	5.7
尼崎市	76	20	152	42.50%	3.3	7.7
大分市	75	23	139	47.10%	2.9	6.2
岐阜市	74	25	244	60.40%	5.9	9.7
松山市	73	29	203	56.30%	3.9	7.0
東大阪市	72	4	199	8.20%	4.0	48.5
宮崎市	63	34	96	82.50%	2.4	2.9
松戸市	59	23	221	47.00%	4.5	9.6
平均	111	21	257	45.20%	5.5	15.8

〔出典〕公益社団法人日本図書館協会『日本の図書館 統計と名簿 2017』〔2018 年（平成 28 年）2 月〕より

¹⁴ 松戸市教育委員会「松戸市図書館整備計画」（2015 年 5 月）15 ページより
[\[https://www.city.matsudo.chiba.jp/kyouiku/syakai_bunka_supotu/toshokan_keikaku.files/matsudo-tosho_keikaku_new.pdf\]](https://www.city.matsudo.chiba.jp/kyouiku/syakai_bunka_supotu/toshokan_keikaku.files/matsudo-tosho_keikaku_new.pdf)（最終アクセス日：2018 年 12 月 21 日）

¹⁵ 住民 1 人あたりの貸出延べ冊数のこと。貸出カードはその自治体で勤務している人や近隣自治体の住民も含まれることが多いが、定住人口で算出することが多い

¹⁶ 図書館利用カードを作成している登録者 1 人あたりの貸出延べ冊数のこと。登録者貸出延べ冊数を登録者数で割り算出する

また、図書館施設の老朽化や狭隘化のため、資料の保存にも苦慮しています。2010年（平成22年）には旧古ヶ崎南小学校内に約3.9万冊規模の閉架書庫を、2016年（平成28年）には松戸商工会議所別館に約1.5万冊規模の閉架書庫を新設しましたが、それでも蔵書収容能力は約54.4万冊に留まっており、それ以上に蔵書を増やすことができない状況です。今後、幅広い資料の充実と多様な蔵書の構築を図るためには、資料の保存場所の確保は必須となってきます。

■有識者インタビューから

- 市立図書館本館は老朽化が進んでおり狭いと感じているが、入口展示や特集コーナーなど、狭いながらも色々な工夫がされている。また、こどものとしょかんや子ども読書推進センターでも掲示物や企画展示などが素晴らしく、制作しているスタッフの熱意が感じられる

■学生グループインタビューから

- 公共図書館では会話ができないというイメージが強いですが、聖徳大学の図書館にあるような、個室になっていて会話ができるスペースがほしいです

2.4. 閲覧スペース

本館及び分館ともに余剰スペースがなく、閲覧スペースを十分に確保できないことから、図書館で本を読む、調べ物をするなど、滞在することが難しい環境です。

図書館名	図書館本館	子ども読書推進センター	常盤平	稔台	小金原
座席数	210	14	21	19	24
図書館名	矢切	馬橋	古ヶ崎	五香	小金
座席数	19	8	9	4	32
図書館名	明	六実	東部	新松戸	馬橋東
座席数	11	29	26	17	13
図書館名	小金北	松飛台	二十世紀が丘	八柱	八ヶ崎
座席数	6	13	12	20	9
図書館名	和名ヶ谷				
座席数	33				

〔出典〕松戸市立図書館「平成30年度 図書館要覧」3ページより

2.5. 利用者向けのインターネット利用環境

閲覧スペースと同様に、インターネット端末の設置スペースも十分に確保できないため、インターネットサービスの提供も一部の施設（本館、常盤平、小金原、小金、六実、新松戸、和名ヶ谷）にとどまっています。設置場所を必要としない無料Wi-Fiサービスの提供も一部の限られたエリア（本館1階、3階のみ）でしか行われておらず、滞在型図書館としての機能を果たせていません。

3. 潜在的な市民の力の可視化

これまでみてきたように、松戸市の図書館には施設面で様々な課題があります。こうした課題は単に建物の問題であるだけでなく、そこで提供されるサービスや機能にも影響を与えます。インターネットが普及した時代に情報を得るだけであれば、大きな施設は必要ないと思われがちです。

しかし、そうした時代だからこそ、市民が実際に足を運び、思い思いに過ごすことができる、空間としての図書館の意味はかえって重要になっています。昨今、全国各地でオープンしている滞在型図書館が、そのことを示しています。

実際に各地の図書館では、図書館を使った様々なイベントやセミナーを自ら企画することで図書館への来館を促すだけでなく、市民サークルなどが自主的に行うイベントや展覧会を図書館やその隣接スペースで実施することで、多様な市民活動の見える化を実現しています。

しかし、松戸市立図書館では延床面積が限られている分館はもとより、本館においても基礎となる所蔵スペース、座席数ともに確保が不十分であるため、市民活動の可視化のために割けるスペースがありません。飲食を共にしながら語らえるカフェや子どもたちが互いに話し合いながら一緒に学べるグループ学習スペースなど、他市の図書館や図書館を中心とした複合施設で目にする機会が増えた憩いの場や学びの機能を提供することも、現状維持モデルでは困難です。

図書館利用カードの登録率の減少が指摘される一方で、図書館は最も幅広い市民に利用される公共施設・文化施設です。そのような公共施設・文化施設としての図書館が、市民活動の可視化に十分に貢献できる環境づくりが、今後必要になってきます。

■有識者インタビューから

- 現在の図書館は貸出だけのイメージ。「静かに本を読む」だけではない、図書館への入口をつくりたい
- 松戸市には市民が集える場所がないのではないかと。松戸市民の多くが土日は市外に出掛けてしまっていると思う。松戸市民が松戸市で集える場所があればいいと思っているのだが、そういった場所になるのであれば、本を介してのんびりと過ごせる居場所としての図書館であってもいいと思う
- 市民センターの多くは貸し部屋となってしまうので、市民の交流ができていないのではないかと。市民センターを生かす上で、センター内の図書館は交流のツールになる可能性があるのではないかと
- 松戸市民と図書館利用率の高い周辺自治体の市民との間に大きな違いはなく、市民の図書館に対する期待は大きい。また、図書館の潜在的な利用者は少なくない。市民と行政が組んで良い図書館をつくれる可能性が大きい地域である

4. 松戸市の地域課題

図書館政策の立案にあたって重要な点の1つが、自治体の上位計画との整合性であることは、「第1編 現状認識」内の「3. 松戸市の計画と図書館」で述べた通りです。厳しさを増す市の財政状況を踏まえて、図書館でも市民が直面している課題解決に資することで、限られた財源の使い道として多くの市民の支持を得る必要があります。市民に生涯学習の機会を提供するとともに、より広い視点から、様々な課題解決への貢献が求められます。

2012年（平成24年）12月に文部科学省が告示した「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」を参考に、全国図書館協議会が発表した「公立図書館における課題解決支援サービスに関する報告書」¹⁷では、課題解決支援サービスを「住民の生活や仕事に関する課題や、地域の課題の解決に向けた活動を支援するため、住民の要望及び地域の実情を踏まえて実施されるサービス」と定義しています。

このように、課題解決支援サービスは、近年、多くの図書館で取り組まれており、社会問題や家庭問題、地域、防災・災害の他、ビジネス情報や健康・医療情報、法律情報、産業など多岐にわたっています。

松戸市においても、子どもたちの安全な居場所や成長支援の場の提供といった青少年の自立支援をはじめ、幼稚園・保育園・小学校の連携を推進する取り組み、生活習慣病予防のための健康増進事業、高齢者の健康を推進する介護予防サービスの充実や障害者の自立を支援する取り組み、起業や事業承継といった中小企業の経営を支援する取り組みの他、企業誘致といった企業の立地促進等のビジネス支援などの様々な地域課題・取り組み課題があります。

このような課題解決に向けたサービスが図書館でも重要となります。

■有識者インタビューから

- 公共的な社会教育の場、無料で使うことができる活気ある「コミュニティとしての図書館」が中央館に求められる役割。図書館・郷土資料館・カフェ・子育て支援・高齢者交流スペースなどが融合した総合的な施設でなければならない。活用できる、コミュニティの中心になる必要がある
- 生涯学習という視点からも図書館は重要。図書館が地域ともしっかり連携して、市民交流が生まれる楽しい場となる必要がある
- 図書館は自分を高める場所であり、そして高齢者の健康寿命を延ばす場所である

¹⁷ 図書館協議会 2015年度（平成27年度）「公立図書館における課題解決支援サービスに関する報告書」より

5. 人的資源の課題

ここまで論じてきたように、市民活動を可視化する滞在型の図書館づくりや、課題解決型のサービスを市民に提供していくためには、高い専門能力を持つとともに、これまでの司書の役割にとらわれず、市民と市民をつなぐハブとしての能力を有した、コミュニティマネジメント¹⁸と呼ぶべき能力を備えた人材の確保や育成が不可欠です。

有識者インタビューで指摘されているように、本来の図書館司書は、対人能力に優れたレファレンス能力と最新の情報技術の活用スキルを兼ね備えた人材です。しかしながら、松戸市の現状の人事制度では、図書館司書の専門職制度が確立されておらず、そうした人材の確保及び育成が課題となっています。

今後も引き続き様々な方面に必要性を訴え、理解してもらうとともに、色々な分野で活躍する松戸市民の高い専門能力を、図書館を通じて活用してもらうための仕組みづくりを行い、図書館の「人材」の境界を拡張する必要があります。

日々の運用業務を支える非常勤職員のあり方については、図書館の運営体制全体を見直す中で議論されるべきですが、現在の松戸市が直営で運営する体制を維持するにあたっては、130名を超える非常勤職員の労務管理や欠員が出た際の人材確保などの課題に直面しています。

こうしたことから、図書館の管理・運営における指定管理者制度の導入や窓口業務の委託など、様々な図書館運営体制を検討し、総合的に判断していくことが求められます。

■有識者インタビューから

- レファレンスサービスなど、図書館が持つ専門的なサービスを住民に積極的に活用してもらうとともに、ICTやビジネスなどに関わる専門的な知識やスキルは、地域・住民の中にあるものを図書館に取り入れる流れをつくるべき
- 図書館で実際に課題解決を行う場合、ビジネスや医療、法律等、様々な分野の資料やデータベース等が必要となり、また、専門知識をもった専門職が必要となる。市民の自己実現を、情報提供で支援することが司書の仕事であり、真に役立つ図書館の形成は、優れた司書を育成することに掛かっている
- 図書館で実際に課題解決を行う場合、ビジネスや医療、法律等、様々な分野の資料やデータベース等が必要となり、また、専門知識をもった専門職が必要となる。市民の自己実現を、情報提供で支援することが司書の仕事であり、真に役立つ図書館の形成は、優れた司書を育成することに掛かっている

¹⁸ コミュニティのメンバーの関心や課題を吸い上げて関係者間で共有したり、関係する行政や企業とコミュニティとの橋渡しを行うことで、コミュニティの活性化や健全な発展を促す役割

第3編 今後のあり方

1. 今後の図書館機能

1.1. 課題発見・解決型図書館かつ滞在・交流型への拡張

前述の通り、松戸市は市民の高い潜在能力を有しながら、その活動が市民の間で十分に共有されているとは言えません。松戸駅以外にも、新松戸駅や東松戸駅をはじめとした複数の路線が乗り入れる駅である交流拠点が存在することから、市域全体の様々な市民が訪れ、思い思いに過ごすことができるだけでなく、互いに交流できる場となることが図書館には求められています。

また、趣味や娯楽のための読書機会の提供だけでなく、起業や事業承継をはじめ、子育てや格差解消などの課題解決の支援機能も、これからの図書館のあり方として不可欠なものとなっています。

そうした状況に応じて、松戸市立図書館は、資料の収集・整理・保存・提供を基本的な機能とした上で、課題発見・解決型かつ滞在・交流型の図書館へと、機能を拡張していくことが望ましいと考えます。

課題発見・解決型の図書館への拡張については、「松戸市図書館整備計画」で「課題解決型の図書館」として述べている通りですが、課題解決に先立つ「課題発見」についても明記しました。社会の変化のスピードが早まり、様々な課題が混在する中で、自らが解決すべき課題を見つけ出し、共有することがより重要になっており、図書館機能の拡張もそうした方向性を取り入れる必要があります。

滞在・交流型の図書館については、ゆったりとした閲覧スペースや飲食ができるカフェスペース、対話しながらグループで勉強できる学習スペースなどのイメージが定着しつつあります。

「滞在型図書館」として知られる岐阜市立中央図書館では、利用者が「ここにいることが気持ちいい。何度でも来てみたくなる。ずっとここに居たくなる」¹⁹と思えることを目標に掲げ、開館準備に取り組みされてきたと聞き及んでいます。

さらに、滞在する場に加え、滞在する市民の交流が見える場としての役割も期待されており、先進事例を参考にしながら、松戸市独自の「滞在・交流型」図書館のあり方を検討していきます。

■有識者インタビューから

- 未来の図書館への期待としては、入口でゆっくり座ってくつろげる空間があり、読み聞かせのドームなどがあると活動の場が広がるだろう。また、図書館は静かにする場所ではあるが、遊びと交流の場所でもあってほしい
- 公共的な社会教育の場、無料で使うことができる活気ある「コミュニティとしての図書館」が中央館に求められる役割。図書館・郷土資料館・カフェ・子育て支援・高齢者交流スペースなどが融合した総合的な施設でなければならない。活用できる、コミュニティの中心になる必要がある

¹⁹ 吉成信夫「図書館は公園である ～本がひととまちをつなぐ～」より
〔https://www.jstage.jst.go.jp/article/kanto/55/0/55_1/_pdf/-char/ja〕（最終アクセス日：2019年2月12日）

1.2. 松戸市としての方針

「松戸市立地適正化計画」では、「松戸市都市計画マスタープランにおける将来都市構造の考え方」が示されています。その拠点形成の考え方として、「今後の広域交通条件の向上、本市に対する広域的な拠点形成への期待、余暇時間の増加や情報化・高齢化等を背景に新たな産業分野が成長する可能性等に配慮して、調和のとれた土地利用を図りながら、多様な活動や広域的な交流を可能とする活力ある都市づくりを目指すこととしています」²⁰と述べられています。

また、都市機能を誘導する拠点としての設置箇所についても示されています。

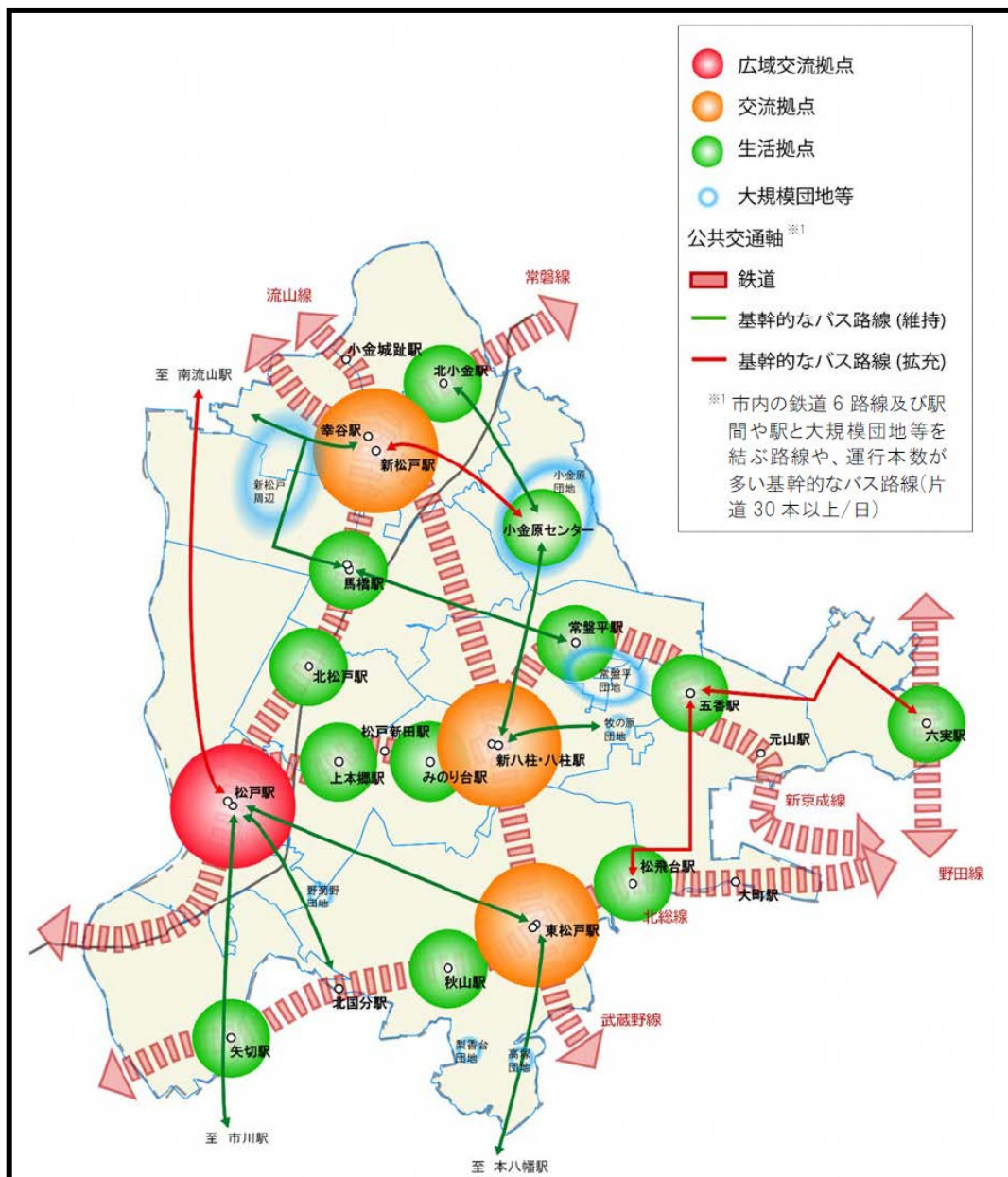
拠点設置の方向性

拠点の分類	拠点設定箇所	拠点の特性
広域交流拠点	松戸駅周辺	大型商業・業務機能や行政機能等とともに、日常生活に必要な一通りの機能を備えた拠点
交流拠点	新松戸駅周辺、 新八柱・八柱駅周辺、 東松戸駅周辺	広域交流拠点を補完する広域性・集客性の高い施設のほか、日常生活に必要な機能を有する拠点
生活拠点	北松戸駅周辺、馬橋駅周辺、 北小金駅周辺、上本郷駅周辺、 みのり台駅周辺、常盤平駅周辺、 五香駅周辺、矢切駅周辺、 秋山駅周辺、松飛台駅周辺、 小金原市民センター周辺、 六実駅周辺	日常生活に必要な身近な生活サービス施設を備えた拠点

〔出典〕松戸市「松戸市立地適正化計画」（2018年3月）33ページより

²⁰ 松戸市「松戸市立地適正化計画」（2018年3月）31ページより

〔<https://www.city.matsudo.chiba.jp/shisei/toshiseubi/tosi/ritteki.files/ricchitekiseikakeikaku.pdf>〕（最終アクセス日：2018年12月19日）



〔出典〕松戸市「松戸市立地適正化計画」（2018年3月）34ページ「立地適正化計画における将来都市構造図」より

今後の図書館整備にあたっては、「松戸市都市計画マスタープランにおける将来都市構造の考え方」を考慮する他、市域内でのバランスを考慮し、松戸市の東西南北に拠点となる地域館機能を備えた図書館施設（次ページ参照）を整備する方向で進めることが望ましいと考えます。

具体的には、広域交流拠点である松戸駅周辺（西）に中央館を、交流拠点である東松戸駅周辺（南）及び新松戸駅周辺（北）それぞれに地域館を整備するとともに、中央から東エリアをカバーするため、八柱・常盤平駅周辺（東）にも地域館を整備することも一考に値するものと考えます。

拠点設定の方向性と図書館整備の拠点（案）

拠点の分類	拠点設定箇所	図書館整備の拠点（案）
広域交流拠点	松戸駅周辺	中央館 ● 市内全域
交流拠点	東松戸駅周辺 新松戸駅周辺 八柱駅・常盤平駅周辺	地域館 { ● 東松戸 ● 新松戸 ● 八柱・常盤平

1.3. 「松戸市図書館整備計画」における図書館施設の構成及び規模

現状維持型モデルでは十分なサービスを提供できないため、「松戸市図書館整備計画」では望ましい図書館サービス機能を有するモデルとして、下記のような構成・規模としており、図書館サービスの中核であり図書館ネットワークの拠点となる「中央館」、課題解決支援や地域コミュニティの拠点として交流機能を備えた「地域館」、日常生活圏域内での利便性を重視した「分館」の設置を検討すべき点としています。

施設の構成及び規模

施設区分	構成	規模
中央館	調査・研究支援機能 課題解決支援機能 交流・学習支援機能 収集・保存機能	蔵書 100 万冊以上 書架・閲覧席のほか交流及び、生涯学習支援に必要なスペース等
地域館	課題解決支援・地域交流機能 貸出・情報提供機能	蔵書 5 万冊以上
分館	貸出・情報提供機能	蔵書 5 万冊未満

〔出典〕松戸市教育委員会「松戸市図書館整備計画」（2017年5月）52ページより

現在の本館は所蔵スペースが限られていることから、「松戸市図書館整備計画」が定める 100 万冊以上の蔵書を所蔵することができず、約 16 万 7,000 冊を所蔵するのみとなっています。また、現在の分館においても、最も蔵書が多い常盤平分館でも約 3 万 7,000 冊であり、5 万冊以上の蔵書を持つ分館がなく、課題解決支援や地域交流機能を有することを定めた地域館に転用することは困難です。

この「松戸市図書館整備計画」を受けて、「松戸市立地適正化計画」では、以下のように具体的な方針が謳われています。

《広域交流拠点・交流拠点における図書館機能の充実》

- 現在、広域交流拠点である松戸駅周辺に立地する市立図書館「本館」は、蔵書数の増加や機能充実を図り、「中央館」として整備します。
整備箇所等については、松戸駅周辺整備や新たな図書館中央館整備の検討の中で具体化していきます。
- 地域の中核となる分館を「地域館」として位置付け、地域交流機能等を充実し、交流拠点である新松戸駅周辺、東松戸駅周辺に整備します。

〔出典〕松戸市「松戸市立地適正化計画」（2018年3月）74ページより

そこで、「松戸市図書館整備計画」及び「松戸市立地適正化計画」で示された役割や機能を備えた図書館の整備を行うにあたり、目指すべき中央館・地域館・分館のあり方を、次の項目以降で示します。

1.4. 複合施設としての図書館のあり方

図書館の整備を進めるにあたり、施設の複合化は全国的な流れとなっています。2013年（平成25年）以降は、全国の公共図書館の80%以上が複合施設です²¹。必要とする施設が1カ所に集約されることで、市民にとって利便性が増すとともに、図書館と他の機関や施設との連携も容易になることが期待されます。複合施設として図書館と併設される施設は、公民館や学習室から、子育て支援センターやハローワーク、そして飲食や買い物ができるカフェやコンビニエンスストアまで様々なものがあります。公共施設だけではなく、民間の商業施設に図書館が併設されたり、建設や運営に民間資金が導入されるケースもあります。

近年では、まちづくりと公共交通ネットワークの再編を含む「コンパクト＋ネットワーク」²²政策を推進する一環として、図書館を含む公共施設の複合化が進められている側面もあります。「松戸市立地適正化計画」でも、新拠点ゾーンが「文化・子育て・教育・商業・公共公益的な施設等が複合した施設の整備」とされ、施設の複合化が謳われています。それらを踏まえ、新拠点ゾーンに含まれる中央館や交流拠点の地域館についても、施設の複合化を含め検討していきます。

そして、新しく施設が建設される場合、図書館を含む機能が単に同じ建物に同居しているだけでは複合とは言えず、それぞれの施設が有機的に連携を図ることが重要です。サービスや企画面での連携を図るとともに、各施設の職員が一丸となることも必要です。

図書館を中核とする複合施設で機能融合に優れた例として、長野県の塩尻市民交流センター「えんぱーく」が挙げられます。「えんぱーく」では、図書館の他に子育て支援センターやハローワークの機能、観光課による観光案内、学習室やホールなどの貸室の機能が融合した施設として運営されています。図書館の中の展示スペースで、地元企業の特産品や企画展示が行われ、その周辺で関連書籍の紹介コーナーがつけられています。職員も担当以外の施設でどのようなことが行われているか関心を持つとともに、利用者からの質問に積極的に答えられるよう、施設全体で情報が共有されています。

このように、「えんぱーく」を設置したことで、これまで単体で活動していた各部署が連携し、企画やサービスの提供等を融合することができたと考えられます。2019年（平成31年）1月に開館した福島県にある複合施設の須賀川市民交流センター「tette」でも、塩尻市に倣って図書館を含めた市民交流センターを設置することで、機能やサービスの融合を実現しています。

今後、松戸市で図書館を中核とした複合施設を整備する場合においても、サービスや機能の融合を実現するため、優れた先進事例の取り組みについて、調査・研究していきます。

■有識者インタビューから

- 公共的な社会教育の場、無料で使うことができる活気ある「コミュニティとしての図書館」が中央館に求められる役割。図書館・郷土資料館・カフェ・子育て支援・高齢者交流スペースなどが融合した総合的な施設でなければならない。活用できる、コミュニティの中心になる必要がある

²¹ 常世田良、伊東直登、吉成信夫ほか「図書館の連携サービスの可能性と課題」より
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/toshokankai/69/2/69_80/pdf]（最終アクセス日：2019年2月18日）

²² 国土交通省の公式ホームページ「コンパクト・プラス・ネットワーク」のページより
[http://www.mlit.go.jp/toshi/toshi_ccpn_000016.html]（最終アクセス日：2019年2月18日）

2. 中央館のあり方

中央館は、「松戸市図書館整備計画」で述べられている通り、松戸市の図書館ネットワークの中心として、資料の収集・保存の拡充に加えて、調査・研究支援や課題発見・解決支援、生涯学習支援、市民の交流の場としての中枢機能を備えた様々な役割が求められます。従って、基礎となる資料の収集・整理・保存・提供のための空間の確保と、新たな拡張機能を両立するためには、現在の本館の延床面積では不十分です。

中央館に100万冊以上の蔵書を収集・整理・保存・提供し、閲覧スペースと併せて提供する場合、1万㎡以上の規模にする必要があると推定されます。本館に100万冊以上の蔵書があり、人口40万人台の豊田市と長崎市の図書館は、1万㎡を超える延床面積の本館を有しています。これらの市は、松戸市に比べ広い市域を持っていますが、人口・自治体面積ともに松戸市により近い枚方市を例にとると、蔵書冊数44.6万冊に対して9,300㎡以上の延床面積となっています。

資料の収集・保存・整理・提供機能の確保とともに、先に述べたような滞在・交流型図書館として一般閲覧席や調査・研究支援のための静寂なスペース、交流を目的としたオープンなスペース等を配置するためにも、1万㎡規模の空間の確保は必要になるものと考えます。

人口が同規模の自治体との図書館本館比較 ※自治体面積順

自治体名	自治体面積 (km ²)	本館の延床面積 (㎡)	本館の蔵書冊数 (万冊)	本館の閲覧席数 (席)
豊田市	918.32	12,567	101.3	580
長崎市	406.40	11,659	112.7	380
枚方市	65.12	9,302	44.6	320
松戸市	61.38	1,932	16.7	246

これまで述べてきたように、1万㎡規模の延床面積は、基礎となる蔵書の構築と、様々な課題の解決支援、そして市民が思い思いに滞在することから交流が生まれる中央館を実現するための空間的な基盤となるものです。このような延床面積を有する中央館で、どのようなサービスを提供していくかについては、今後、中央館の整備が具体化した際に、十分に検討していきます。

■有識者インタビューから

- 公共的な社会教育の場、無料で使うことができる活気ある「コミュニティとしての図書館」が中央館に求められる役割。図書館・郷土資料館・カフェ・子育て支援・高齢者交流スペースなどが融合した総合的な施設でなければならない。活用できるコミュニティの中心になる必要がある
- 本を読んだり、借りるだけでなく「憩いの空間」としての市民がつながる機能が大事になる。駅の複合施設の中に図書館が入っていけばよいのでは。人口の大きなまちだからこそ、目的がなくても近くに来たから寄ってみようという市民にも来てもらわないといけない

3. 地域館のあり方

地域館は中央館と同様に、地域の課題発見・解決支援にあたるとともに、地域交流の場としての役割を担うことも期待されます。そのために必要な情報提供として、基本的なレファレンスサービス²³はもちろん、当該地域に関連する情報提供もその役割の範囲となります。こうした地域館の整備を、東松戸駅周辺、新松戸駅周辺、八柱駅・常盤平駅周辺エリアで検討します。

拠点設定の方向性と図書館整備の拠点（案）〔再掲〕

拠点的分類	拠点設定箇所	図書館整備の拠点（案）
広域交流拠点	松戸駅周辺	中央館 ● 市内全域
交流拠点	東松戸駅周辺 新松戸駅周辺 八柱駅・常盤平駅周辺	地域館 { ● 東松戸 ● 新松戸 ● 八柱・常盤平

地域館の資料の提供にあたっては、中央館との連携を重視しますが、使用頻度の高い資料5万冊以上を所蔵することを「松戸市図書館整備計画」では定めています。また、上述の3つの交流拠点として相応のエリアをカバーする必要があります。

しかしながら、現在、これらのエリアに点在する分館は図書館の延床面積が狭く、スペースが限られた市民センター内に併設されているため、地域館に転用することは困難です。

地域館としての機能と役割を実現するには、まず5万冊以上の蔵書を所蔵するために最低600㎡以上の延床面積のある図書館が必要となります。これに加えて地域交流拠点としての機能を果たすためには、通常の閲覧席に加えて、交流が行える空間が必要となるため、1,000㎡以上あることが望ましいと考えます。

参考として千葉県内で5万～8万冊の資料を所蔵している図書館の延床面積をみると、ほとんどの図書館が少なくとも600㎡以上の延床面積を有していることがわかります。

²³ レファレンスサービスとは、情報や資料を求めている利用者に対し、図書館員が図書館の資料と機能を活用して資料の検索を援助し、必要な情報や文献を紹介または提供する個人的援助のこと

5万冊以上8万冊未満の蔵書がある千葉県内の図書館比較 ※延床面積順

図書館名	延床面積 (㎡)	蔵書収容能力冊数 (万冊)	独立・併設
山武市松尾	1,858	6.0	併設館
野田市立せきやど	1,664	5.0	併設館
香取市立佐原中央	1,185	7.8	独立館
鴨川市	1,049	7.4	独立館
山武市さんぶの森	1,027	7.5	併設館
佐倉市立佐倉	970	7.5	独立館
市川市立信篤	912	5.5	独立館
大網白里市	883	5.3	併設館
習志市立谷津	761	5.7	併設館
野田市立北	748	5.0	併設館
野田市立南	743	5.0	併設館
習志市立新習志野	696	6.5	併設館
山武市成東	560	7.6	併設館
八千代市立八千代台	435	6.0	独立館

[出典] 千葉県公共図書館協会「千葉県の図書館 2018 (平成 30 年度)」(2018 年 10 月) 10~11 ページより抜粋

地域館でどのような機能やサービスを実現していくべきかについては、地域ごとの特徴をどのように定義するのか、中央館との具体的な役割分担や地域館ごとに特徴を打ち出すべきか、その特徴をどのように各地域館の蔵書構成やサービス内容に反映していくのかなどの検討が必要です。

■有識者インタビューから

- 図書館を通じて市民間の交流を促し、人材を活かしながら知恵や経験を地元に落としてもらえる仕組みをつくる。まち全体が出会いと交流の場となり、図書館は特にそういう場になってほしい
- 生涯学習という視点からも図書館は重要。図書館が地域ともっと連携して、市民交流が生まれる楽しい場となる必要がある

4. 分館のあり方

分館は、資料の提供（貸出・返却）や地域情報の提供が主な役割となります。「松戸市図書館整備計画」では、蔵書冊数を5万冊未満とし、下限冊数は定めていません。

「第2編 課題抽出・論点提示」で述べたように、同規模自治体と比べ松戸市には多くの分館があり、地域に溶け込んだ自宅から徒歩圏内にある身近な図書館として、幼児から高齢者まで多くの市民が容易に訪れ、利用することができることが松戸市立図書館の特徴として広く認知されています。一方、現状の分館は、市民センター内に併設されている場合が多く、延床面積も100㎡前後の館が多数を占めています。

今後の分館のあり方としては、分館の規模・数ともに現状を維持していく案、市内全域のバランスや位置など分館の適正配置を検討した上で延床面積200～300㎡程度の分館に集約していく案、サテライト（貸出・返却及び情報提供に特化する）案などが考えられます。

しかしながら、すでに併設する施設の老朽化も進んでいることから、将来必要とされる分館のあり方について、他館との関わりを踏まえ、効果的・効率的な機能の集約化も視野に、検討していきます。

■有識者インタビューから

- 分館については、数が多いことはよいことだが、松戸市の場合は、規模が小さい。小さい図書館に、どのような機能を持たせるか、よく考えるべきだろう。現在そのまま維持するのであれば、市民が参加する形で子どもたちが本に触れる場としての機能を強めるとよいと思う。大人のニーズを重視するのであれば、統廃合もありだと思うが、その場合は駅の近くに新たな拠点を設けるのがよい
- 分館そのものをなくしていくのは反対であり、広く多機能にリニューアルしていくことで、福祉や介護、防災の拠点として活用されるべきと考える。図書館分館がバスや徒歩で行ける距離にあることが大切
- 分館は地域の見守り機能としてのニーズがある。子育て問題や高齢者問題を解決するコミュニティの核になり得る
- 松戸市は他の自治体と比べて図書館の分館が多く、図書館が利用しやすい環境であり、誇れることだと思う

4.1. 現状維持案

分館が19館ある現状のメリットは、多くの市民の徒歩圏内に図書館があることです。子どもたちが最初にふれる図書館であるとともに、交通弱者である高齢者でも気軽に訪れることができる公共の文化施設としても利用されています。子育て世代の大人にとっても、近くにある分館はアクセスしやすい存在です。

有識者インタビューでは、19館ある分館には地域の見守り機能としてのニーズがあるとの意見がありました。分館訪問時に、毎日のように決まって新聞を読みに来られていた高齢の方が利用されなくなり心配したことがあるという話もありました。各地域にきめ細かく配置された分館だからこそ担うことができるサービスを検討することで、地域における図書館機能を高めていくことが可能になると考えます。

一方、現在の分館には、訪れた市民が本に親しむための閲覧席が十分になく、子どもたちのための読み聞かせのスペースも十分に確保できていないという課題があります。また、貸出や返却でカウンター業務が混雑する時間帯には、レファレンスなどのサービスの提供に手が回らないこともあります。このように、現在の市民ニーズに十分に応えていくために必要な空間的なスペースも人的資源も全く確保できていない状況です。

現状維持案は分館が併設された市民センターなどの建て替え時に、前述の課題にどのように応えていくのかが問われます。建物の延床面積や職員数を増やさず、現状の分館数を維持したまま、市民ニーズに応えるには、新たな財政負担や利用者である該当地域の市民参加による分館運営を取り入れるなどの議論も必要です。

■有識者インタビューから

- 分館が19館あるのは何よりの強みで、市民が徒歩で行ける距離にある。分館の狭さは、市民センターのオープンスペースを利用すれば解消できるのではないかと。ただし、弱いところは滞在型の図書館ではないところ
- 分館そのものをなくしていくのは反対であり、広く多機能にリニューアルしていくことで、福祉や介護、防災の拠点として活用されるべきと考える。図書館分館がバスや徒歩で行ける距離にあることが大切
- 松戸市のスケールからすると、他自治体と比べて分館数は多い。地域密着という点で、子ども読書活動推進にはよいことであり強みになっている
- 松戸市は他の自治体と比べて図書館の分館が多く、図書館が利用しやすい環境であり、誇れることだと思う

4.2. 延床面積 200～300 m²規模の分館へ集約する案

市民の多様なニーズに応えようとする場合、分館でも延床面積 200～300 m²程度は必要と考えます。第 2 の案として、1 館あたりの広さとしてこの面積を確保し、既存の分館を集約していく案が考えられます。この案では、上位計画が定める地域館が整備された場合、その近隣の分館を地域館に統合することも検討します。あわせて、分館が併設される市民センターなどの建物が老朽化によって移転や建替えをする際には、現状の面積のままではなく、基準となる面積を確保できるような形も考慮します。

図書館が提供する機能やサービスの内容は、建物の延床面積ありきの議論ではないことは前述の通りですが、延床面積を 200～300 m²とする根拠の 1 つとして、現状の 100 m²前後の松戸市の分館が手狭であり、十分な機能やサービスの提供が難しいことが挙げられます。これについては、すでに多くの市民から声が寄せられているものであり、特に子育て世代からは、徒歩で行ける距離ではあるものの、ゆっくり子どもと過ごせる場所ではないとの意見が出ています。

例えば、隣接する柏市のこども図書館は、地域住民によく利用されて評価の高い分館です。靴を脱いで親子でくつろげるゆったりしたフロア、授乳のためのスペースやベビーベッドなどの赤ちゃんのための設備、育児のための情報が得られる子育て・母子保健情報コーナー、飲食可能なドリンクコーナーを備えています。蔵書数は 3 万冊、事務室を含む延床面積は 473 m²です²⁴。

このように、延床面積 500 m²程度の空間があれば工夫を凝らしたサービスや機能を十分提供できますが、松戸市では分館が併設されている市内の公共施設のスペース等を鑑み、ここでは 200～300 m²規模の延床面積が相応なものと考えます。

今後、公共施設の再編に合わせて図書館分館がある現公共施設の建て替えや移転が予想されます。各分館でどのような機能やサービスが求められているのか、そのために必要な延床面積は何 m²にすべきかなどについては、中央館や地域館との機能・役割、各エリアにおける他の分館との関わりを総合的に踏まえ、検討していく必要があります。

■有識者インタビューから

- 図書館を通じて市民間の交流を促し、人材を活かしながら知恵や経験を地元に落としてもらえる仕組みをつくる。まち全体が出会いと交流の場となり、図書館は特にそういう場になってほしい
- 分館そのものをなくしていくのは反対であり、広く多機能にリニューアルしていくことで、福祉や介護、防災の拠点として活用されるべきと考える。図書館分館がバスや徒歩で行ける距離にあることが大切
- 分館は地域の見守り機能としてのニーズがある。子育て問題や高齢者問題を解決するコミュニティの核になり得る

²⁴柏市立図書館「こども図書館」のページより [https://tosho.city.kashiwa.lg.jp/homepage/html/17_kodomo.html] (最終アクセス日：2019年2月11日)

4.3. サテライト案

「松戸市図書館整備計画」では、分館の蔵書冊数を5万冊未満とし、下限冊数は定めていません。第3の案として、分館では蔵書を保有せず、資料の提供を中央館や地域館との連携によって行うサテライト型の施設とすることによって、100㎡規模の現在の延床面積でも市民が滞在したり、交流したりできるスペースを確保する案が考えられます。

サテライト案は、現在ではインターネットで資料の予約と受け取り場所を指定できることが前提となる図書館サービスのあり方です。松戸市では、すでにインターネットでの資料予約サービスが提供されています。他市の事例をみると、サテライト型の施設は鉄道駅など多くの住民の導線上に設置されています。世田谷区では、東急二子玉川駅や東急三軒茶屋駅の近くにサテライトに相当する図書館カウンターが設置されています。現在の分館はこうした導線上に立地していないことから、蔵書スペースをどのようなサービスや機能に転用するかがより重要になります。既存の分館数を維持しつつ、滞在や交流機能のためのスペースを分館内で確保するために、既存の分館をサテライト型にするという案についても、検討が必要です。

■有識者インタビューから

- 図書館を実際に利用するには、通勤の動線上にないと難しい。東松戸の駅に営業時間外でも利用できる返却ボックスを設置したり、市内の主要な駅で返却できるとよい

5. 千葉県立西部図書館

2018年(平成30年)1月、千葉県教育委員会が千葉県立図書館の新たな運営方針を示す基本構想²⁵を決定し、現在3カ所ある県立図書館で分散してきた機能を千葉市の県立中央図書館に集約し、業務効率化や費用削減を進めることを発表しました。松戸市内にある千葉県立西部図書館及び旭市内にある千葉県立東部図書館については、県から地元市(松戸市、旭市)への移譲も視野に議論を進めるとしています。

県立西部図書館は「松戸市立地適正化計画」で「交流拠点」として挙げられた八柱駅・常盤平駅周辺エリアにあります。そのため、老朽化した施設の改修等により、県立西部図書館跡地を同エリアの地域館として活用することも可能と考えられます。また、八柱駅・常盤平駅周辺エリアは松戸市のほぼ中央に位置しているため、県立西部図書館を配送便の拠点とすることで、効率よく他の市内の図書館へ資料を配送することが可能となります。

県立西部図書館の1階には車庫があり、配送車の出入りも可能です。また、建物の1階から3階には書庫を有しており、資料の保存には恵まれた環境です。

「松戸市図書館整備計画」の「規模及び施設の構成等」では、中央館の構成として「収集・保存機能」が挙げられています。広域交流拠点にもなる中央館を広く使うために、県立西部図書館跡地に「収集・保存機能」を持たせることも、1つの可能性として検討していきます。

²⁵ 千葉県教育委員会「千葉県立図書館基本構想」より

[<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/shougaku/shisetsu/tosyokan/documents/kihon-kousou.pdf>] (最終アクセス日: 2019年1月20日)

6. アウトリーチサービスのあり方

今後における分館のあり方の1つとして、分館を集約していく場合、図書館へのアクセスが不便になるケースが想定されます。しかし、分館が統廃合されたとしても、「松戸市立図書館整備計画」で謳う「松戸市立図書館は開館以来、市民の生活圏の中にある身近な図書館として、市民のためのサービスを展開」することを引き続き維持していかなくてはなりません。そこで、図書館への来館が難しい方等へ資料を届けるため、アウトリーチサービス²⁶を充実させていくことが必要になると考えます。



現在、松戸市では、移動図書館車による高齢者施設や病院施設等への巡回サービスや市内在住で身体障害者手帳の交付（1級～3級）を受けている方、介護保険で要介護認定を受けている方向けに資料の宅配サービスを実施していますが、分館が統廃合された場合、特に交通弱者である高齢の方や障害のある方たちへの対応が求められるものと考えます。そこで、移動図書館や宅配サービスの利用について、高齢者施設や病院に入所・入院している方だけではなく、ご自身で図書館を訪れることが難しい方々なども対象としたサービス内容などを検討していきます。

■有識者インタビューから

- 特別養護老人ホームでは、実際に自分で読むことが難しい入居者も多く、本を借りる方もそれほど多くはないが、文化的な生活支援と外部との連携・接点は重要な要素であり、移動図書館は双方にとって有効な手段となっている

²⁶ アウトリーチサービスとは、来館が困難または不可能なため従来図書館サービスを受けられなかった人たちにも、サービスをいきわたらせるため、図書館が出掛けてサービスを提供すること

7. 図書館に求められる機能

7.1. 次世代を担う子どもたちを育むための支援

予測不可能な時代を迎える次世代の子どもたちにとって、今後は自分で考える力を身につけていくことが重要となってきます。従って、図書館でも、幼少期から本に親しみ、読書習慣を形成する手助けを行うとともに、そこから様々なことを読み取る力が培えるよう、発達段階に応じた支援が必要です。

また、インターネットの普及により、誰もがすぐに調べ学習をすることが可能になった一方で、検索技術の差によって、個人が得られる情報に大きな差が出るようになってきました。子どものうちから、本などの紙媒体だけでなく、パソコンやタブレット端末を使ったデータベースの活用など、ICTを活用した検索技術を学んでいくことも重要であり、こうした支援を図書館が担っていく必要があります。

有識者インタビューでも、将来の松戸市を担う子どもたちの健やかな成長のための図書館を求めご意見がありました。子どもたち一人ひとりの人生や感性をより豊かにするため、図書館も積極的に子どもたちの支援に関わっていくことができると考えています。

■有識者インタビューから

- 未来の図書館への期待として優先順位をつけるとしたら、まず子どもたちの教育のベースとしての図書館。子どもに舵を目いっぱい切った図書館であっても市民の理解が得られるのではないかと。あとはお年寄りなど、社会的弱者のサポートをしっかりと行ってほしい。現役世代向けには、個人で買うことが難しい専門書などを揃えてもらえるとよいのではないかと
- 子どもたちが本に触れる機会をつくりたい。そのために図書館でもマンガを活用すべき。文芸作品とマンガに垣根を感じない人たちも増えてきて、マンガから舞台や映画が生まれ、ビジネスにもなって、海外でも認められている。しかし、図書館がそこに追いついていないと感じる
- 本は過去の遺産ではなく、自分の<知>を創るものだ。しかし、今の子どもたちは家庭で本と出会う機会が減っているため、図書館が担う役割は大きい

7.2. ビジネス支援

課題解決型の柱としてビジネス支援を掲げる図書館としては、鳥取県立図書館²⁷をはじめ、福井県鯖江（さばえ）市文化の館（図書館）²⁸、岩手県紫波町（しわちょう）図書館²⁹などの事例があります。今後は、有識者インタビューでもあったように、様々な分野の中小企業の事務所や工場が集積し、老舗も多い松戸市として、起業や創業に加え、既存の事業所の事業継承の支援に注力することも必要となってきます。これまでのイメージから図書館には積極的にビジネス支援を求めないとの声も聞かれましたが、こうした声に真摯に耳を傾けるとともに、今後具体的に取り組んでいく必要があると考えます。

■有識者インタビューから

- 課題解決型サービス（大人のための図書館）がこれからの公共図書館の生き残り策だろう。しかし、現状は児童サービスと高齢者の居場所というイメージが強い。図書館最大の課題は、そのイメージを払拭すること
- 松戸市は老舗も多く、ビジネス支援の面でも図書館の役割は大きい。創業起業というより、松戸らしさを受け継いでいくための地域密着型の後継者問題や事業承継における地域創生としての支援が重要と思われる
- 課題解決型の図書館としてビジネス支援を行うには、松戸市には課題が多いように思う。むしろ目的が曖昧でも訪れることができ、そこから出会いや発見が生まれるような居場所であり、コミュニティとなるような図書館であることが望まれているのではない

²⁷ 2006年（平成18年）にビジネス支援などで第1回目となる Library of the Year 大賞受賞

²⁸ 2014年（平成26年）に地場産業支援の取り組みなどで Library of the Year 優秀賞受賞

²⁹ 農業支援で知られ、2016年（平成28年）にオガールプロジェクトとともに Library of the Year 優秀賞受賞

7.3. 格差解消支援

児童や生徒の貧困問題として語られる格差社会の解消も、公共図書館が解決に資するべき重要な課題の1つです。「子ども食堂」が身体にとっての栄養を提供することで子どもたちの貧困の解消に取り組んでいるのと同様に、図書館は本や人とのつながりを通して心の栄養を提供することで子どもたちに将来への希望を与えることができます。

また、格差問題は子どもたちだけの課題ではありません。技術革新による社会の変化と長寿化により、社会人が学ばなければならない場面はかつてとは比べものにならないほど増えており、新しい技術を習得し、新たな仕事に適応できるかどうかによって、収入格差も大きく広がる時代になりました。生涯学習の場としての図書館が格差解消のために取り組めることも考えていきます。

■有識者インタビューから

- 人権は全ての人が生まれながらにして持っている幸せになるための権利である。本には人を幸せにする力があると思う。悩みを抱えている市民や子どもたち、社会的に困難な状況にある人々に、図書館という場を通じて、力や希望を与えられたらと思う
- 格差是正や貧困家庭の情報収集のサポート等は公立図書館として重要かつ本来あるべき機能。子育て支援として、子どもだけではなくお母さんたちの交流の場としての機能は今後重要になっていくかと思う
- 格差社会の解消、フェアな社会の実現のためにも、インターネットによる情報だけでは不十分である。コストを掛けなければ入手できない知識情報が少なくない。
- 図書館は、無料のインターネットでは検索できない有料のデータベースを提供することで、知識の格差を埋める役割を果たすこともできる

8. 学校図書館との連携

児童・生徒たちにとって身近な図書館として、毎日通う学校の図書館があります。そこで、図書館と小学校・中学校図書館との図書館システムを統合し、連携を図ることで、児童・生徒たちが学校にいながら公共図書館の本を検索し、自分たちが通う学校図書館で受け取り、返却できる仕組みづくりや地域交流の拠点として、公共図書館と学校図書館が将来、連携していく可能性についても研究します。

全国的に公共図書館と学校図書館を同じ施設内に設置するケースは増加する傾向にあり、施設や機能をどの程度共有するかにもいくつかの組み合わせがあります。地域住民の目がセキュリティとして機能する地域では、既存施設の学校図書館を地域住民にも開放するケースもあります。

近隣の流山市では、おおたかの森小・中学校敷地内に誰もが利用できるおおたかの森こども図書館が併設されていますが、ここでは出入口から書架や閲覧席まで学校図書館とは交わることなく分けられており、セキュリティに配慮した設計となっています。このような先行自治体の事例の調査を通じて、松戸市に合った学校図書館との連携方法を中長期的な視点で考えていきます。

有識者インタビューでは、図書館で行われている学校貸出の課題として、学校では予約した資料を最寄りの分館まで受け取りに行く時間が取れないという意見がありました。学校図書館への資料の配送については、岡山県の瀬戸内市民図書館のように元校長・園長などの退職した学校関係者がシルバー人材センターの職員として資料を届けている自治体もあることから、業務委託や市民参加による集配実現の可能性について、教職員や保護者等の協力を求めていくことも含めて調査・研究していきます。

■有識者インタビューから

- 学校図書館と公共図書館の連携における課題は、教師が学校貸出の予約をしても受け取りに行く時間がないことが多く、学校へ届けてほしいという声が多い。また、市川市の「学校図書館支援センター事業」の「物流ネットワーク」では、公共図書館と学校、学校間で必要な図書の相互貸借するシステムがあり、参考にしてほしい
- 分館の学校への併設や整理など、方向性としてはありだが具体的な段階ではない。分館は地域に根差しているので難しい問題
- 地域開放を想定して入口が2つある学校図書館ができるなどの動きもある
- 学校図書館との連携については相互理解が必要で、特に公共図書館の司書が学校教育と学校図書館のことをしっかり勉強しないといけないだろう。図書館をもっと楽しい場所、児童・生徒、また市民が集える場所にしていく必要がある。そのためのプログラムを、図書館は開発していくべきだが、取り組みが遅れている。また、本の配送は、即日・翌日くらいで対応するべきだろう

9. 運営モデル案

9.1. 多様な運営モデル

時代の変化を受けて、市民が図書館に求める機能やサービスは広がっていますが、それに応じた十分な職員や予算が十分に配分されることは難しい状況が続いています。そうした状況を踏まえて、図書館でも現在の直営モデルのみに拘らず、他自治体で行われている指定管理者制度や窓口業務委託の導入の他、市民参加の幅を広げることで市民運営といえるようなモデルについても検討します。

運営モデルの検討にあたって注意すべき点は、直営か指定管理者制度の導入かといった、二者択一の議論とならないようにすることです。指定管理者制度の導入は全国的に進んでおり、2017年(平成29年)11月現在、245自治体、638館において指定管理者による管理・運営が行われていますが³⁰、一口に指定管理者といっても、全国展開している大手企業が手掛けるものから、より地域と密着した地元企業が経営するものもあります。その他にも、地元の図書館ボランティアを母体とするNPO法人が指定管理者となっているケースもあります。

指定管理者が行う業務の範囲も、ビルなどの施設の管理から、カウンター業務などのサービスを含むもの、レファレンスや課題解決などの専門性の高い分野や企画・運営全般までを手掛けるものまで多岐に渡ります。そうした状況を踏まえて、市民のニーズに応じていくために最適な運営モデル案を検討していきます。

■有識者インタビューから

- 各地で指定管理について見ている立場から、図書館司書の専門性を高めるには指定管理よりも直営の方が計画的に人材を育成できると考える。松戸市のような財政状況の自治体であれば、直営がよいのではないかと。指定管理では現場で判断が求められるようなコミュニティサービス、例えば災害時への対応などは難しい
- 公共図書館においては現代の人たちの生活スタイルに応じて開館時間の時間帯や休館日などの意識を変えていくことが必要。また、思いやりのあるユニバーサルデザインを採用し、いつでも誰にでも心の支えとなるような図書館を目標としてほしい。また、情報拠点として地域の文化を育み、子どもの成長を支える図書館を目指してほしい

³⁰ 桑原芳哉「公立図書館の指定管理者制度導入状況：近年の動向」より [\[https://www.jstage.jst.go.jp/article/seia/50/0/50_31/pdf\]](https://www.jstage.jst.go.jp/article/seia/50/0/50_31/pdf)
(最終アクセス日：2019年2月11日)

9.2. 市民や企業との協働

松戸市に限らず、どの自治体でも行政に頼るのではなく、市民自らが身近な課題を自分たちで主体的に解決することが増えています。また、実際に自分たちが住むまちの発展や行政サービス維持のために何かをしたいと考えている声は、市民に限らず、企業からもあがっています。そこで、市民や地元企業と図書館が協働していくことも、運営モデルの1案として調査・研究していきます。

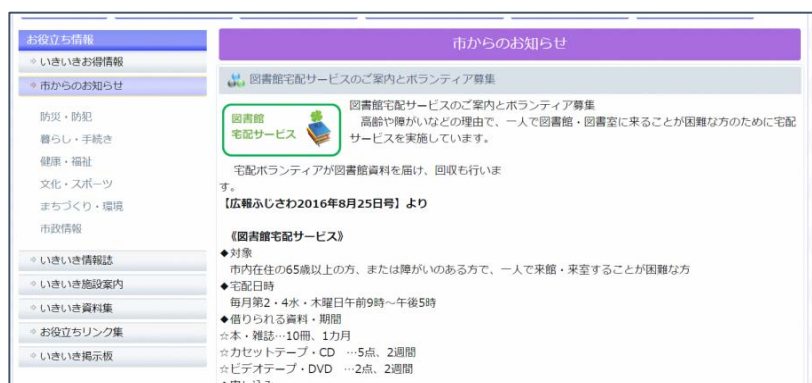
ここでは、アウトリーチサービスとして市民に資料を届ける業務を図書館が市民や企業と協働で行っている他自治体の事例を紹介します。神奈川県茅ヶ崎市では、株式会社ジェイコム湘南湘南局が高齢者、身体が不自由な方、病気・怪我等の理由により図書館に来館することが困難な方へ、茅ヶ崎市立図書館の資料を自宅へ宅配するサービスを実施しています。



画像出典) 株式会社ジェイコム湘南 湘南局「図書館資料をご自宅までお届けするサービスの実施にあたり茅ヶ崎市と新たに協定を締結」より [\[https://newsreleases.jcom.co.jp/news/80102.html\]](https://newsreleases.jcom.co.jp/news/80102.html)

神奈川県藤沢市では、市内在住の65歳以上の方で、1人で図書館へ来館することが困難な方に宅配サービスを提供しています。その宅配は、図書館に登録された宅配サービスボランティアが担っています。今後自治体の財政的な課題も増える中で、このように「市民が市民を支える取り組み」も重要です。

資料を届けることで、図書館での活動を伝えるなど、図書館に関する情報も届けられます。アウトリーチサービスのあり方として、こうした事例を踏まえた調査・研究も行っていきます。



画像出典) 藤沢市「図書館宅配サービスのご案内とボランティア募集」より [\[http://ikiikifujisawa.jp/city-info/164-cityinfo-tosyo-takuhai.html\]](http://ikiikifujisawa.jp/city-info/164-cityinfo-tosyo-takuhai.html)

■有識者インタビューから

- 市民参画、市民運営としての図書館をつくるために、行政は市民を触発することが大事な役割になるだろう

- 主体的な市民による友の会組織を立ち上げて参画を促すことも必要。市の施策として、図書館が「知の集いの場」となるような「社会教育と生涯教育の拠点」という人材バンク機能も求められる

10. 窓口業務の効率化・自動化の促進

図書館の窓口業務の負担を減らし、効率的な図書館運営を行っていくために IC タグシステムの導入を推進します。IC タグシステムを導入することにより、職員によるカウンターでの貸出や返却業務の高速化や省力化を図ることができます。さらに、自動貸出機を併せて導入することで、利用者自身が貸出手続きすること（セルフ貸出）もできます。加えて、蔵書点検にかかる時間を大幅に短くでき休館日を減らせる他、BDS（Book Detection System：貸出手続き確認）ゲートと併せて導入することで、不正持ち出しを防止することもできます。

セルフ貸出機の導入によって、カウンターでの貸出業務がなくなるわけではなく、様々な利用者が訪れる公共図書館では、自動貸出機の使い方の問い合わせ対応という新たな業務が発生することにも留意が必要ですが、それらを上回るメリットが見込まれます。さらに、セルフ貸出機の導入により、どのような資料を借りているのか、他人に知られることなく、貸出を容易に行うことができるという、利用者からみたメリットもあります。

IC タグシステムの導入にあたっては、BDS ゲートや自動貸出機、自動返却機等のハードウェアの費用が発生する他、既存の蔵書に IC タグを貼るための時間と費用が初期コストとして発生するため、計画的に予算を確保する必要があります。また、BDS ゲートの設置は、設計等の理由からも建物の建て替えや移転に合わせて行うことが効率的なため、新たな開館に合わせ、関係部署の理解を得ながら連携を図り、進めていくことも必要です。

11. 各種計画の策定

今後、このあり方検討を政策に反映し、実施していくためには、図書館整備の具体化に合わせて、基本計画書や基本設計書、サービス運営計画書など、実施段階に合わせたより具体的な計画を策定する必要があります。

併設された公共施設が老朽化し、建て替えや移転が必要となるケースに備えて、個々の施設への対応が求められる以前に、全体的な方針を明確にすることが必要です。他自治体では、建物の新設ありきではない計画として、図書館振興計画を定めているところもあります。松戸市においても、実施計画等について、市民の意見なども参考にしながら、検討していきます。

12. 産学官連携の促進

「第1編 現状認識」でも確認した通り、松戸市には多様な地場産業や専門分野の異なる5つの大学・短期大学をはじめとした多くの教育機関などを有しており、有識者インタビューでも、企業経営者やそれらのキャンパスに籍を置く大学の先生方などの協力を得ることができました。こうした人的リソースを図書館として積極的に活用するために、各企業や市民と大学・短期大学を積極的につなぎ、連携を図ってまいります。

第4編 インタビューのまとめ

※50 音順、敬称略

1. 有識者インタビュー

1.1. おーい図書館代表 青木 和子

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 1992年（平成4年）に小・中学校が週休2日制になったこと、また、市内に児童館が1つしかなかったことから、学齢期の子どもたちの居場所づくりが課題となり、その居場所としての役割を図書館が果たせるのではないかとの思いで、「おーい図書館」を翌年の1993年（平成5年）1月に設立した
- 医療・法律・ビジネス支援など高度なサービスを提供する図書館が増えているが、松戸市は努力しているとはいえ、まだ追いついていない

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 東松戸地域の複合施設内に地域館規模として建設予定の図書館への図書館職員の増員をお願いしたい。図書館サービスを強化するため、図書館職員としての資質向上に必要な研修などの人材育成に努めてほしい
- 東松戸は急激な開発で市の施設の空白地帯になっている。よい形で複合施設の計画が進み、市民が期待する地域館が開館できることを切に願う
- 松戸市には図書館協議会がないので、市民が参画できるような図書館協議会をつくってほしい

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 松戸市内の学校や大学図書館と公共図書館の連携は市民の利益になると思う

以上

1.2. 元松戸市生涯学習部長／松戸市図書館整備計画審議会委員 青柳 洋一

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 松戸市の人口に比べて図書館の規模は脆弱すぎる
- 松戸市の基本戦略の4本柱として、「1.子育て」、「2.高齢者」、「3.まちの再生と賑わい」、「4.雇用」となっている
- 様々な分野の第一線で活躍している市民が暮らしているが、出会いや交流の場がなく、その能力を市のまちづくりに生かしてもらえない機会がない

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 図書館を通じて市民間の交流を促し、人材を活かしながら知恵や経験を地元に落としもらえる仕組みをつくる。まち全体が出会いと交流の場となり、図書館は特にそういう場になってほしい
- 本の貸出機能だけではなく、オープンスペースで楽器を演奏したり、市民活動の成果を発表できたり、もっと自由に使える開かれた図書館になるとよい
- 分館に関しては本館や地域館へとつなぐことができれば蔵書を減らすことが可能だろう。そのかわりに新松戸、東松戸など中心市街地にはしっかりとした地域館を設けてはどうか

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- くらしや仕事に役立つ図書館という点は今後も重要。図書館の機能として新しいことに挑戦したり、起業しようという人をサポートしていけるようなものになってほしい
- 人の交流や出会いが生まれる図書館にするためには商業施設と一緒にすることも検討の価値があると思う
- 一般市民の多くは地域の文化や歴史を知らないまま過ごしている
- 図書館を新設する場合は博物館との連携、施設の複合化なども視野に入れて検討すべきだろう

以上

1.3. NPO 法人松戸子育てさぽーとハーモニー理事長 石田 尚美

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 松戸市には市民が集える場所がないのではないか。松戸市民の多くが土日は市外に出掛けてしまっていると思う。市民が松戸市で集える場所があればいいと思っているのだが、そういった場所になるのであれば、本を介してのんびりと過ごせる居場所としての図書館であっていいと思う
- 松戸市は各地域の市民センターに図書館があるのが特徴
- 子育てで市内に戻ってきている人も増えている。子育て世代が住みやすいのが特徴

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 市民センターの多くは貸し部屋となっていて、市民の交流ができていないのではないか。市民センターを活かす上で、センター内の図書館（分館）は交流のツールになる可能性があるのではないか
- 地域の交流の場と市内の中心の交流の場をうまく活かしたらよいと思う。そのためには、市民を募ってワークショップ的なことを開催し、みんなで考える図書館にしたらよいのではないか

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- お母さん世代の図書館離れが進んでいて、スマートフォンを見る機会が多く、子どもたちに絵本のよさが伝わりにくい。そうした変化の中で、今のニーズに合わせた図書館のあり方が問われている。絵本を介した親子の交流の場、1つの居場所としてゆっくり本を読む、勉強をする場、本を介して多世代が交流できる場、色々な世代が来て満足が得られる図書館が必要だと感じている

以上

1.4. 松戸商工会議所専務理事 薄葉 博司

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 統計データを見ると貸出数は増えているので、概ね問題ないのではないかと

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 本を読んだり、借りるだけではなく「憩いの空間」としての市民がつながる機能が大事になる。駅の複合施設の中に図書館が入っていけばよいのでは。人口の大きな街だからこそ、目的がなくても近くにきたから寄ってみようという市民にも来てもらわないといけない
- 松戸市の郷土資料こそ、最大の専門書だ。国立国会図書館にあるような専門書と競争するのではなく、松戸にしかないものが大事

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 行政は社会の変化で何が求められているのか研究することが大切だと思う。常に疑問を持って臨んでほしい
- 大事なのは、行政の職員の人が熱意と自信を持ってまとめていくこと。情熱が大切。学校図書館の本との連動など、根拠法が異なることが課題であると理解はしているが、1つの課題を聞いて現場の人が真剣に頑張らないと、何も変わらない

以上

1.5. 昭和女子大学名誉教授 大串 夏身

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 市民が集い主体的に図書館に関わって何かを実現していく場所にしていく必要があるが、アイデアもプログラムも欠けている
- 現在の図書館は貸出だけのイメージ。「静かに本を読む」だけではない、図書館への入口をつくりたい
- 公共図書館の専門性も今のままでは、対応できなくなる。自分たちで知識と技能を高めて、対応して行くことが求められるが、それが行われていない

◆ 課題抽出・解決策の提示

- レファレンスサービスなど、図書館が持つ専門的なサービスを住民に積極的に活用してもらおうとともに、ICTやビジネスなどに関わる専門的な知識やスキルは、地域・住民の中にあるものを図書館に取り入れる流れをつくるべき
- 学校図書館との連携については相互理解が必要で、特に公共図書館の司書が学校教育と学校図書館のことをしっかり勉強しないといけないだろう。図書館をもっと楽しい場所、児童・生徒、また市民が集える場所にしていく必要がある。図書館はそのためのプログラムを開発していくべきだが、取り組みが遅れている。また、本の配送は、即日・翌日くらいで対応するべきだろう
- 分館の数が多くはよいことだが、松戸市の場合は、規模が小さい。小さい図書館に、どのような機能を持たせるか、よく考えるべきだろう。現在のまま維持するのであれば、市民が参加する形で子どもたちが本に触れる場としての機能を強めるとよいと思う。大人のニーズを重視するのであれば、統廃合もありだと思うが、その場合は駅の近くに新たな拠点を設けるのがよい

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 小中高生だけを対象としたワークショップなどを他の自治体で行った事例を聞くと、小中高生たちは、話し合いながら学び合える場を求めるという結果になっている
- 市民参画、市民運営としての図書館をつくるために、行政は市民を触発することが大事な役割になるだろう

以上

1.6. 柏市学校図書館

◆ 現状認識、エリアの特性

- 柏市では学校図書館指導員を小・中学校全校に配置している。学校図書館指導員は市が直接雇用し、図書館の制度、配架、環境面などの研修に力を入れ整備を進めてきた
- いかに子どもたちの教育にコミットし、学校図書館指導員が学校の授業を支援できるかが重要
- 全校配置によって学校の先生たちも安心感が出て、子ども司書などの取り組みを積極的に応援してもらえるようになった。その結果、子ども司書の数を大きく伸ばすことができた

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 学校図書館指導員は免許を必要としないので、研修によって質の担保を図っている。柏市の指導課が研修の狙いを定め、学校図書館アドバイザーのアドバイスのもと、現場を知るリーダーが年 12 回の研修を具体化している
- 公共図書館との連携は進めているがまだ十分でない部分もある。連携、調整については、新しい年度が始まる時に年間の見通しを話し合う会議を行っている。調べ学習での連携や子ども司書講座の共同開催など、具体的な取り組みを通じてさらに改善していきたいと思っている

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 分館の学校への併設や整理など、方向性としてはありだが具体的な段階ではない。分館は地域に根差しているので難しい問題
- 地域開放を想定して入口が 2 つある学校図書館ができるなどの動きもある
- まずは学校で自由に読める、図書館に自由に行ける環境をつくるのが大事だろう

以上

1.7. 聖徳大学文学部准教授 片山 ふみ

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 図書館ボランティアによる読み聞かせを聞かせてもらったことがあるが、ボランティアの方の自己実現の要素が強いように感じた。また、子どもに楽しんでもらうというより、言葉を覚えさせるためのようなものもあり、少し違和感があった。図書館側の取り組みとしてボランティアの育成は課題かもしれない
- 中央館を充実させることと、近くに細々とした分館を充実させることのどちらが望まれているのか、市民による議論が必要ではないか

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 子どもたちの来館率向上のためには、ブックトークで学校に出向く等、学校との連携が必要だと思われる。YA 世代への取り組みとしてはビブリオバトル、アニメーションなどの参加型の取り組みの導入も考えてもよいかもしれない
- 格差是正や貧困家庭の情報収集のサポート等は公立図書館として重要かつ本来あるべき機能。子育て支援として、子どもだけではなくお母さんたちの交流の場としての機能は今後重要になっていくと思う
- レファレンスサービスなど、図書館が持つ専門的なサービスを住民に積極的に活用してもらうとともに、ICT やビジネスなどに関わる専門的な知識やスキルは、地域・住民の中にあるものを図書館に取り入れる流れをつくるべき

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- カナダでは、高校生が高齢者に Twitter や iPad の使い方をサポートする等、ボランティアの場としての機能がある。それが高校の単位になり、さらには自分が社会の一員であることを意識させることができれば公共施設としての役割になるのでは
- 子ども読書推進計画で重要なことは親、保育園、学校、地域の連携。年齢ごとに途切れるのではなく、バトンを繋いでいくような連携が必要。全体を通してみたときの人生における読書プランが大事となる
- 「ぬいぐるみの図書館おとまり会」や子どもが犬に本の読み聞かせをする「R.E.A.D プログラム」などは小さい子どもに人気（読書に付加価値をつける試み）
- 子どもだけでなく、高齢者に対する読み聞かせも必要な時代になっている

以上

1.8. 株式会社キカワ代表取締役 木川 総一郎

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 松戸市立図書館は、分館の数（19分館）は多いが規模が小さい
- 松戸には大規模工場が多いが、各産業の中小企業も多い。さらに、毎年ここ数年は、人口が増加傾向にある

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 課題解決型の図書館としてビジネス支援を行うには、松戸市には課題が多いように思う。むしろ目的が曖昧でも訪れることができ、そこから出会いや発見が生まれるような居場所であり、コミュニティとなるような図書館であることが望まれているのではないか
- 子どもたちが本に触れる機会をつくりたい。そのために図書館でもマンガを活用すべき。文芸作品とマンガに垣根を感じない人たちも増えてきて、マンガから舞台や映画が生まれ、ビジネスにもなって、海外でも認められている。しかし、図書館がそこに追いついていないと感じる

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- いい図書館はまちのブランド力を高めるので、投資をし、利便性が高いところに、いい図書館をつくることには意味がある。いい図書館は、高所得者層や若い人たち、子育て世帯の人たちがそのまちに引っ越してきて、消費活動が活発になっていくことに一役買っている
- 図書館を新設する場合、有識者会議のような検討委員会でプランをつくっていくのと同時に、行政側も行政としてのビジョンをしっかりとって、お互いに共通認識を持ちながらプランをつくっていくことが重要である

以上

1.9. 流通経済大学法学部准教授 坂野 喜隆

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 分館は地域の見守り機能としてのニーズがある。子育て問題や高齢者問題を解決するコミュニティの核になり得る

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 社会教育、文化のまちづくりにとって、図書館は核となるべき。ライブラリアン（図書館司書）の育成が重要であり、近代文学や郷土資料の知識も必要となるだろう
- 主体的な市民による友の会組織を立ち上げて参画を促すことも必要。市の施策として、図書館が「知の集いの場」となるような「社会教育と生涯教育の拠点」という人材バンク機能も求められる

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 各地で指定管理について見ている立場から、図書館司書の専門性を高めるには指定管理者制度よりも直営運営の方が計画的に人材を育成できると考える。松戸市のような財政状況の自治体であれば、窓口業務は直営運営がよいのではないか。指定管理者では、現場で判断が求められるようなコミュニティサービス、例えば災害時への対応などは難しい
- 行政学・公共政策の分野から見ると、民間の経営手法を公共部門に導入しようというNPM（New Public Management）の流れがあるが、課題もある

以上

1.10. パパサークルメンバー 佐藤 慎一郎

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 読み聞かせに使う本を図書館で借りることができればよいが、日常の動線上になく、開館時間も共働き世帯の生活スタイルに合っていない
- 松戸市の地域情報について広く支持されているメディアがない。市の広報では不十分で、その他の地域情報があまりないと感じている

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 図書館を実際に利用するには、通勤の動線上にないと難しい。東松戸駅に営業時間外でも利用できる返却ボックスを設置したり、市内の主要な駅で返却できるとよい

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 図書館は本を借りるだけでなく、地域の情報が入手することができる機能も求められる。また、まちの様々な場所にその場所に適した本があるとよい。例えば、スポーツセンターに健康やダイエットに関する本が置いてあったり、コンサートやワークショップが行われている「ゆいの花公園のマグノリアハウス」に花に関する本や絵本があったりする
- LINE やメールマガジンなどを活用して、日常的には図書館を利用できない市民にも情報が届けられるつながりが必要では。図書館が地域の情報発信、人と人をコネクトする役割を果たしてくれるとよいと思う。東松戸には自分のような新興住宅地住民が多いので、そういった施策は支持されるのではないかと思う

以上

1.11. 社会福祉法人六高台福祉会常務理事 正田 貴之

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 特別養護老人ホームでは、実際に自分で読むことが難しい入居者も多く、本を借りる方もそれほど多くはないが、文化的な生活支援と外部（社会）との連携・接点は重要な要素であり、移動図書館は双方にとって有効な手段となっている
- 柏の葉 T-SITE は本を買うという目的がなくても足を運びたくなる。居心地がよく、わくわくする感覚があり、読書を誘発する仕組みがあるのではないかと。そういった雰囲気は図書館にもあるとよいと思うが、反面、そこまで民間と競合するものかどうかという意見もありそうだ

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 未来の図書館への期待として優先順位をつけるとしたら、まず子どもたちの教育のベースとしての図書館。子どもに舵を目いっぱい切った図書館であっても市民の理解が得られるのではないかと。あとはお年寄りなど、社会的弱者のサポートをしっかり行ってほしい。現役世代向けには、個人で買うことが難しい専門書などを揃えてもらえるとよいのではないかと

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 施設にも入らず、インターネットも使えないお年寄りもいらっしゃるため、そうした方へのサポートも図書館としてできるとよいのではないかと
- 移動図書館から宅配になった場合、本を棚から探して選ぶというソフトの部分が消えてしまい、インターネットで本を購入するのと変わらなくなる。ハード面だけではなく、ソフト面のサービス提供の検討もお願いしたい
- 様々な制約があり実際に図書館へお連れすることが難しい状況の中、移動図書館が入居者の生活の質の向上に果たしている役割は大きい

以上

1.12. 立命館大学文学部教授 常世田 良

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 松戸市は人口規模が大きく都心に近い。流山市・市川市・船橋市など図書館政策において松戸市より進んでいる自治体と比べて財政力指数も悪くなく、図書館が市民ニーズに対応して取り組めることはまだまだ多い
- 松戸市民と図書館利用率の高い周辺自治体の市民との間に大きな違いはなく、市民の図書館に対する期待は大きい。また、図書館の潜在的な利用者は少なくない。市民と行政が組んで良い図書館をつくれる可能性が大きい地域である

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 課題解決型サービス（大人のための図書館）がこれからの公共図書館の生き残り策だろう。しかし、現状は児童サービスと高齢者の居場所というイメージが強い。図書館最大の課題は、そのイメージを払拭すること
- 図書館で実際に課題解決を行う場合、ビジネスや医療、法律等、様々な分野の資料やデータベース等が必要となり、また、専門知識をもった専門職が必要となる。市民の自己実現を、情報提供で支援することが司書の仕事であり、真に役立つ図書館の形成は、優れた司書を育成することに掛かっている
- 自己責任・自己判断型社会へ移行する日本の社会に必要なことは、判断するための材料である情報を行政が責任を持って市民へ提供すること。図書館には、働き盛りの市民の役に立つチャンスがある。コストは掛かるが、アウトプットが大きい分野である

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 図書館の本質は、常に新しいメディアや技術を導入することである。コンピュータも自治体の本庁舎より先に導入した図書館が少なくない
- 格差社会の解消、フェアな社会の実現のためにも、インターネットによる情報だけでは不十分である。コストを掛けなければ入手できない知識情報が少なくない
- 司書がデジタル系も含めた情報の専門職であることを再認識しなければならない。専門的なデータベースは、専門職の支援が不可欠である
- 図書館は、無料のインターネットでは検索できない有料のデータベースを提供することで、知識の格差を埋める役割を果たすこともできる
- サードプレイス論には賛成であり、大学のラーニング・コモンズ³¹のようなスペースを公共図書館も持つべきで、愛知県安城市、塩尻市、荒川区など新しい図書館では珍しくない
- 国内の図書館では、AIやロボットの導入の実証実験が始まっている
- 新図書館の計画においては、司書がより高度な情報サービスに取り組めるよう、当然検討すべき課題である

以上

³¹ ラーニング・コモンズとは、図書館などに設けられる学びのための共有スペースのこと。ICT 機器や学習スペースなどを備え、グループ学習など、様々な学習形態の活用に対応する。電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。その際、学習を支援するサービスも提供する

1.13. 聖徳大学児童学部教授 長江 曜子

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 松戸市は環境もよく、人材も豊富だが、それらの資産が活かされていない
- 市内に複数の大学があるため、多様な教育資源と学びの場が市内にある。そのため、連携できる可能性がある

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 分館そのものをなくしていくのは反対であり、広く多機能にリニューアルしていくことで、福祉や介護、防災の拠点として活用されるべきと考える。図書館分館がバスや徒歩で行ける距離にあることが大切
- 運営における市民参加も重要。ボランティアやサポーターを活用するためには、社会教育的事業を行うことで、受入システムを構築する必要もあるだろう（資格取得者や未経験者を含む）

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 公共的な社会教育の場、無料で使うことができる活気ある「コミュニティとしての図書館」が中央館に求められる役割。図書館・郷土資料館・カフェ・子育て支援・高齢者交流スペースなどが融合した総合的な施設でなければならない。活用できる、コミュニティの中心になる必要がある
- 生涯学習という視点からも図書館は重要。図書館が地域ともっと連携して、市民交流が生まれる楽しい場となる必要がある
- 松戸市は老舗も多く、ビジネス支援の面でも図書館の役割は大きい。創業起業というより、松戸らしさを受け継いでいくための地域密着型の後継者問題や事業承継における地域創生としての支援が重要と思われる
- 図書館は自分を高める場所であり、そして高齢者の健康寿命を延ばす場所である
- 本は過去の遺産ではなく、自分の<知>を創るものだ。しかし、今の子どもたちは家庭で本と出会う機会が減っているため、図書館が担う役割は大きい

以上

1. 14. 馬橋小学校／新松戸西小学校学校司書 畑澤 隆子

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 市立図書館本館は老朽化が進んでおり狭いと感じているが、入口展示や特集コーナーなど、狭いながらも色々な工夫がされている。また、こどものとしょかんや子ども読書推進センターでも掲示物や企画展示などが素晴らしく、制作しているスタッフの熱意が感じられる
- 市内 65 校全てを学校司書の固定配置校にするには勤務条件や予算の関係もあり、実現には時間が掛かりそうだが、そんな中でも、学校司書全員が頑張っている学校図書室を支えている

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 学校図書館と公共図書館の連携における課題は、教師が学校貸出の予約をしても受け取りに行く時間がないことが多く、学校へ届けてほしいという声大きい。また、市川市の「学校図書館支援センター事業」の「物流ネットワーク」では、公共図書館と学校、学校間で必要な図書の相互貸借するシステムがあり、参考にしてほしい
- 学校司書の勤務時間は年間 134 日と決まっており、環境整備・読書学習支援面からも時間が足りないため、全ての学校に選任の学校司書が配置されていくことで問題は解決するほか、本と子どもの「出会い」と「学び」は豊かに広がると思う

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 学校図書館においては、公共図書館や保護者、地域とも連携して子どもたちの文化活動も支援できたらよい。
- 読書、学習支援においても学校司書が常時配置され、積極的に取り組むことで、子どもの夢や希望を育むことになる
- 公共図書館においては、現代の人たちの生活スタイルに応じて開館時間の時間帯や休館日などの意識を変えていくことが必要。また、思いやりのあるユニバーサルデザインを採用し、いつでも誰にでも心の支えとなるような図書館を目標としてほしい。
- 情報拠点として地域の文化を育み、子どもの成長を支える図書館を目指してほしい

以上

1. 15. 聖徳大学文学部教授 村山 隆雄

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 松戸は市街地で大きく、松戸駅周辺は若い人も多い。大学もいくつかあり、学びのまちであるイメージ。戸定邸に代表される徳川家の遺産が色濃く残る地域でもある
- 松戸市のスケールからすると、他自治体と比べて分館数は多い。地域密着という点で、子ども読書活動推進にはよいことであり強みになっている
- 松戸・流山・柏一帯は、学校教育を含めて共通性のある地域であり、これらの地域が身近にあることは図書館や本へのアクセスという点でよいこと

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 貴重書の企画展などで本の展示を行う場合、本に触れられないことが多い。子どもの本の展示では、手にとって触れること、体や手を動かすことで子どもの参加率が高まる
- 図書館はなかなか子どもとお父さんとで行く機会が少ない場。文化系・理科系を超えて、科学あそびや理科教育などを積極的に取り上げ、図書館には文学だけではない、もっと広い《本の宇宙》があると感じてもらうことが大切

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 図書館でのマンガの位置づけについては、子どもの読書推進活動でいえば、読めない子をどうやって読む側に来てもらうかが重要であり、マンガはそのきっかけの1つになると思う。松戸市生まれや松戸在住の作家さんの作品を収集するというのもありではないか
- レファレンス内容から利用者の要望を知り、そこにイベントを絡めていくアプローチは有効と考える（例えば、医師などの専門家を招いて、健康について講演会を企画するなど）
- 利用者の「知りたい」に応えるために、専門家の協力を得ていくことも必要。課題解決型図書館として、図書館が地域住民の課題を一緒に考えてくれるようになることが望ましい

以上

1.16. 松戸市社会教育委員／人権擁護委員 森 めぐみ

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 松戸は都心にも近く、新しいもの古いものが入り混じったバランスのとれた街
- 分館が19館あるのは何よりの強みで、市民が徒歩で行ける距離にある。分館の狭さは、市民センターのオープンスペースを利用すれば解消できるのではないかな。
ただし、弱いところは滞在型の図書館ではないところ

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 貸出や広場としての場所提供だけではなく、松戸独自の文化的資料をしっかりと収集・保存することが大事
- 関連機関の間で人やもの（資料・史料）がつながる、紹介サービスができるとよいと思う

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 人権は全ての人が生まれながらにして持っている幸せになるための権利である。本には人を幸せにする力があると思う。悩みを抱えている市民や子どもたち、社会的に困難な状況にある人々に、図書館という場を通じて、力や希望を与えられたらと思う
- 「多文化共生社会」がキーワードになる。思い思いに過ごせる広場のような図書館、一人であっても居場所がある図書館がよい
- 子どもに「こんな本があるよ」と呼び掛けることで、夢・勇気を与え、体験を広げ、学ぶことがあるかもしれない（「橋がかかる」）

以上

1.17. 絵本の会「たんぽぽ」副代表 渡辺 加代子

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 松戸市は他の自治体と比べて図書館の分館が多く、図書館が利用しやすい環境であり、誇れることだと思う
- 市民センターの中で分館の配置されている場所が悪く、案内表示も不親切でわかりにくい。もっとオープンで明るい空間であってほしい
- 学校の空き教室をボランティアに開放できるとよい

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 分館でも本館のカウンター業務と同じレベルのサービスを提供してほしい
- 図書館が貸出だけでなく、誰もが交流できる場となり子どもの居場所としての機能も持つとよい
- 学校に関しては、千葉県と柔軟に対応して、市民が空き教室（例：ボランティアがおはなし会で使用する紙芝居や絵本などの置き場所）を利用しやすい仕組みをつくってほしい

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- おはなし会は参加するお母さんたち同士の横のつながりをつくる機会にもなっている。子育ては今と昔で違うことも多いけれど、人との関わりが大切という点は変わらないのではないか。おはなし会に参加することで、人に対する拒絶がなくなるという声もいただく
- 未来の図書館への期待としては、入口でゆっくり座ってくつろげる空間があり、読み聞かせのドームなどがあると活動の場が広がるだろう。また、図書館は静かにする場所ではあるが、遊びと交流の場所でもあってほしい

以上

1. 18. NPO 法人絵本で子育てセンター認定絵本講師 溝原 有香

◆ 松戸市の現状認識、エリアの特性

- 分館が近くにあるので自転車で出掛けられる。子どもと行くと、子どもが読む本を選んでくれたりもする。インターネット予約が便利でいつも利用している
- 図書館の絵本蔵書の質は悪くないので、お母さんたちには本屋よりもまず図書館の利用を薦めている

◆ 課題抽出・解決策の提示

- 図書館の職員は貸出業務だけする人だと思っていた。サービスとしてのちょっとした声かけがあれば違うのではないか。子どもが手にとって読めるテーブルと椅子が足りていないことも課題
- 絵本講師を始めて、絵本選びに迷っているお母さんたちが多いことを知った。絵本に効率や効果を求め過ぎて、どんな絵本を選んだらよいのかわからないと悩んでいるお母さんたちの声を聞くと、絵本の並べ方は出版社別ではなく、年齢別の分け方がよいのではと思う

◆ 専門的な視点からのアドバイスなど

- 子どもたちは言葉をしゃべることができない年齢でも、絵本を選ぶことで興味を伝えてくれ、それが親子の思い出になる。20冊借りてきたら、それだけで家庭にもミニ図書館ができる
- 絵本に子育てを助けてもらい、絵本から学ぶことがあるという思いが腑に落ちて図書館に行くのが本来の姿ではないか。読み聞かせは「ふれあいの時間」であり、思い出をつくり、後々の生きる力になると思う

以上

2. 学生グループインタビュー

2.1. 聖徳大学文学部 学生グループインタビュー

未来を担う学生が読書や図書館にどのような意見を持っているのか、聖徳大学文学部文学科で片山ゼミ（図書館情報コース）に所属する学生有志6名にグループインタビューを行った結果をご紹介します。

◆ 自分が好きな本と、その本に出会ったきっかけは？

- 私は『はらぺこあおむし』³²という絵本がとても好きです。図書館に行ったときに自分で探して見つけたもので、人に薦めたり、下級生に読み聞かせたりするくらい好きな絵本になりました。絵がかわいいところが特に気に入っています
- 小学生のときに図書館で見つけた海外ファンタジー小説の『ウォーリアーズ』³³という作品が好きです。野生の猫の視点から書かれたユニークな作品で、シリーズを通して読んでいました。猫が好きなので、表紙に猫が描かれているのが気になり、その本を手にとったことがきっかけでした
- 好きな本を何冊かメモしてきました。どれが一番好きかは決められないけれど、『はじめてのおつかい』³⁴は大好きな絵本です。図書館で見つけて読みましたが、自分でも持っていたくなり、親に頼んで買ってもらいました。両親は毎日のように読み聞かせをしてくれましたが、この絵本はその中でもお気に入りの一冊でした
- 小さい頃はあまり読書が好きではありませんでしたが、そんな私を本好きに変えてくれたのが『ハッピーバースデー』³⁵という本です。夏休みの読書感想文を書くために、親に言われて仕方なく行った図書館で見つけたのですが、図書館の読書感想文コーナーでたまたま手にとって読んでみたら、とても面白かったです。この本と出会わなければ、本を好きにならなかったのも、私にとって思い出深い作品です
- 幼稚園の頃に読んだ本で『かみさまからのおくりもの』³⁶というタイトルの絵本が面白かったです。表紙には天使が描かれていました。家にはこの絵本のエプロンシアターがありました。母が幼稚園でこの絵本を使ったエプロンシアターを行っていたからだと思います
- 面白かった本はたくさんありますが、まず『獣の奏者』³⁷を紹介します。この作品とはアニメがきっかけで出会い、原作を読みたいと思うようになりました。友だちにも勧められて、1カ月で外伝まで一気に読みました。次は『夜市』³⁸という小説です。どんなものでも売っている市場が舞台のダークファンタジーで少し怖いお話ですが、人間味があるエピソードもあって、とても好きな作品です。最後は『竜宮ホテル』³⁹という小説です。作家である主人公は妖怪等が見えてしまう体質が原因で家族から疎まれて、心を閉ざしてしまいます。しかし、竜宮ホテルで色々な経験をする中で、心を開いていく物語です。この本もとても面白かったです

³² エリック・カール『はらぺこあおむし』偕成社 1976年

³³ エリン・ハンター『ウォーリアーズ 第1期 ファイヤボー、野生にかえる』小峰書店 2006年

³⁴ 筒井頼子『はじめてのおつかい』福音館書店 1977年

³⁵ 青木和雄、吉富多美『ハッピーバースデー 命かがやく瞬間』金の星社 1997年

³⁶ ひぐちみちこ『かみさまからのおくりもの』こぐま社 1984年

³⁷ 上橋菜穂子『獣の奏者 1 闘蛇編』講談社 2006年

³⁸ 恒川光太郎『夜市』角川書店 2005年

³⁹ 村山早紀『竜宮ホテル』徳間書店 2013年

◆ 電子書籍は利用しますか？

- 電子書籍よりも紙の本の方が好きです（2名が同じ意見）
- 本当に好きなマンガは紙のコミックを集めたいけれど、広告で見て気になった程度であれば電子書籍でよいです
- 小説は読みにくいので電子書籍では読みませんが、マンガは電子書籍も読みやすいと思うので、自分のスマートフォンで読んでいます
- 青空文庫で泉鏡花や国枝史郎の作品を読んでいます

◆ 新しい図書館のどのような機能やサービスに期待しますか？

- まず Wi-Fi 環境を整えてほしいです
- 図書館まで行かなくても本を借りられるようになるとよいと思います。図書館の公式サイトで自分の借りたい本を予約することができ、予約した本は自宅か近所のコンビニまで届けてくれる。返却も近所の返却ポストで行えるようになるとういことです
- カフェやコンビニが併設されていると、図書館に行く機会が増えてよいと思います
- 本の配送には費用がかかるかもしれないが、図書館まで行くのに交通費がかかる人もいるので、金額によっては受け入れられるのではないのでしょうか
- （図書館が電子書籍を無料で提供してくれれば、本を配送しなくてもよいのではないかとのことだが）自分のスマートフォンで小説を読むのは慣れないので、紙の本を送ってほしいです
- 専用の読書端末を借りられるとしても、充電の手間はかかるし、使用している最中に誤って壊さないかといったプレッシャーも感じます。紙の本の方が使い勝手がよいのではないか
- 図書館には固い椅子が多いので、フカフカの椅子（ビーズクッションや人型のクッションなど）が置かれていたら使ってみたいです
- 隣に座る人との間に十分な空間をとることも大切だと思います
- 素材によっては汚れやすいので、革素材など拭くことができる椅子にする必要があります。布製は汚れを吸収するので、清潔感を保つことが難しいと思います
- 子どもは本を舐めたりするので、清潔感を保つために、絵本コーナーには除菌ボックスを設置するのもよいと思います
- 公共図書館では会話ができないというイメージが強いですが、聖徳大学の図書館にあるような、個室になっていて会話ができるスペースがほしいです
- 飲食や会話が許されるスペースを備えた公共図書館もあるけれど、簡素な机と椅子があるだけで、行きたいと思う空間になっていないことが多いです
- ホワイトボードや電源等の設備も大切だと思います
- 照明だけだと暗い印象を持たれるので、適度に外光が入る明るい空間にしてほしいです。本が焼けしないような工夫も必要ですが、明るい空間があると、一般の人も図書館に入りやすいと思います

- 私は人があまりいない場所に座りたいので、座席の埋まり具合が分かる仕組みがほしいです
- ブックカフェが話題になっているので、人気のブックカフェを参考にすれば、一般の人が気軽に入りやすい空間のあり方がわかるのではないのでしょうか
- 足湯がある図書館はどうでしょう
- 静かに音楽が流れている場所が1カ所あるとよいと思います
- 気軽な場所になり過ぎると、若い人も含め居座る人が出てきて、図書館が特定の人たちの溜まり場になってしまわないか心配です。子どもとお年寄りの溜まり場になると、若い世代は行かなくなくなるし、閉鎖的でない開かれた場所になってほしいです

以上

おわりに

近年、人々の価値観や社会ニーズが多様化する中で、これからの図書館は、従来の資料の貸出・返却や収集・保存、情報提供に加え、地域の課題解決や学習・活動支援、さらに多くの市民が集い、互いに知識や情報を共有し交流を図ることで、新たな出会いやつながり、気づきや活動などが生まれる交流機能などの役割も求められています。しかしながら、前述の通り、現状の松戸市における図書館機能と施設の維持では、市民のニーズに応えることが難しい状況です。

また、「松戸市図書館整備計画」に加えて、「松戸市立地適正化計画」の中でも、図書館を中央館・地域館・分館として整備することが明示されています。さらに中央館は広域交流拠点として、地域館は交流拠点として位置づけられることも示されています。そこで今回、この位置づけをさらに具体化していくために、中央館・地域館・分館のあり方を中心としてまとめた、「今後の松戸市立図書館のあり方」を作成しました。本作成にあたって、インタビューにご協力いただき、貴重なご意見をいただいた有識者及び学生の皆さまには、心より感謝申し上げます。

また、八洲学園大学（やしまがくえんだいがく）専任講師の赤山みほ先生にも、インタビューや分館訪問調査を中心にご協力いただきました。特に資料編における「本館・分館の現状分析」では、各分館の分析を中心に専門的な知見に基づく考察を提供していただきました。赤山先生におかれましては、松戸市にキャンパスがある聖徳大学でも図書館に関する授業の講師をされており、本あり方検討で示した大学との連携促進の一端を、結果的に示すことができたのではないかと考えております。

2015年（平成27年）の「松戸市図書館整備計画」の策定にあたって、松戸市図書館整備計画審議会よりなされた提言では、「松戸市立図書館の可能性を活かすのは、それを利用する松戸市民であります。図書館は市民一人ひとりが自分の持つ可能性を活かせるよう支援しなければなりません。今後の図書館づくりにおいて、市民とともに歩み、まちづくりを担う、これからの時代に求められる図書館を実現するよう期待します」という言葉で締められています。

この「今後の松戸市立図書館のあり方」も、市民の皆さまがこれからの松戸市の図書館について関心を持ち、話し合い、「私たちができること」を考えていただくきっかけとなれば幸いです。

以上